

岡鹿門『觀光紀游』 訳注——その二

本稿は本誌前号に発表した岡鹿門『觀光紀游』訳注の続稿である。

今回訳注の対象としたのは、卷一「航滬日記」中の陽曆六月六日以後の部分、「蘇杭日記」の王韜序、丸山鑽序、卷二「蘇杭日記卷上」中の陽曆六月二十一日から七月四日までの部分である。旅程としては、鹿門一行の上海上陸、上海滞在、上海から蘇州までの船旅、蘇州滞在、蘇州から杭州までの船旅ということになる。

底本、訳注の形式等については、前稿冒頭の説明をご覧いただきたい。また、参考にした文献の主なものゝ卷末に掲げた。

(柴田清繼、二〇一三年十一月二十八日記す)

原文 六日〔十三日〕溯黃浦江。一名申江。相伝、春申君鑿此利漕運。其称黃若申、皆取于春申君也。至吳淞、萬家族擁砲臺盛土沙屹然壁立。魏默深曰、「吳淞砲臺、皆置江門之外、洋面之衝、樹鵠以招敵、使敵得以活砲、攻呆堞。而我反以呆砲、擊

甲	山	富	小	柴
斐	崎	田	川	田
涼	妙	沙	智	清
子	子	由	子	繼

活船。故敵百發百中、而我十發九虛。若移之港內岸陰之処、則我得以活砲擊活船^②。以今所見、砲臺自洋面斜折巨江上。豈以魏源有是論、増築歟。自是江広四五百歩^③、而大小汽艦、旁午上下、無少礙碍。

午牌至上海。岸設浮板、出入艦上。潮盈昂起為梯、潮退平接為橋。岸田吟香出迎。共至広業洋行^⑤。広業洋行、販北地海産、三井洋行、販高島石炭^⑥。大倉洋行^⑦、販雜貨者、為我邦大肆。鶴田姓〔幸吉〕延舎楼上、午飯。伴二宮姓〔景輔〕^⑧詣公署。品川領事〔忠道〕^⑨不在、見吳〔頌〕松延〔玟〕二書記^⑩。

訪王紫詮、曰「得書以後、日夜以待」。曾根〔俊虎〕^⑪品川二氏、從松村少將〔惇藏〕^⑫來過。余与坐客倪耘劬〔鴻〕^⑬、就別室筆話。已而酒出、与諸賓酌。忽覺眩暈、吐兩次。蓋連日舟走、神氣未復也。飲半辭帰、就寢即復。

【注】①「春申君」戦国時代の楚の人、黄歇のこと。②「魏黙深」黙深は清末の思想家、魏源（一七九四～一八五七または一八五六）の字。

この引用文の出処と考えられるのは、魏源の『聖武記附録』卷十四軍政篇の一節。『聖武記』（中華書局、一九八四年）により、原文を
掲げる。「御海寇、但有守内河之法、無守海面之法。而吳淞東西砲臺、不近扼内港、皆遠置於口門之外、洋面之衝、樹鶴以招敵、使敵得以活砲攻呆堞、而我反以呆砲擊活船。故賊百攻百中、而我十發九虛。何如移諸港内岸狹之処、使夷船不得如外洋之横恣、而我得以呆砲擊呆船乎」③「四五百歩」八百メートル前後か。一八八四年六月二十日の『郵便報知新聞』「文苑雅賞」所載の鹿門の「支那漫遊日記」には「江幅不六七町」とある。それなら七百メートル前後。④「岸田吟香」一八三三～一九〇五。新聞記者、実業家、教育家。一八七七年、東京銀座に目薬屋「栗善堂」を開き、一八八〇年には上海に渡り、その支店を開いた。⑤「広業洋行」当時上海にあった三軒の日本人貿易商店の一つ。経営者は鶴田幸吉。一八七六年八月開業。北海道の海産物の販売に従事。⑥「三井洋行」三井洋行はいわゆる三井物産。経営者は東京出身の上田安三郎。一八七七年十二月開業。「高島」は幕末以来、炭鉱として栄えた現長崎市高島。⑦「大倉洋行」いわゆる大倉組のこと。経営者は東京出身の赤羽定教。一八八三年八月開業。⑧「二宮姓〔景輔〕」一八五九～？。宮城県人。一八七九年以後、

石炭業に従事し、上海に滞在。⑨「品川領事〔忠道〕」一八四一〜一八八一。長崎出身で、もとオランダ通詞。在清初代領事、総領事を務めた。この年の七月に解任、帰国した。⑩「呉〔碩〕」呉碩（一八二四〜一八九二）は幕末長崎の唐通事。維新後は上海などの領事に勤務した。松延珪は日本人。翌一八七五年には煙臺の領事に就任。⑪「曾根〔俊虎〕」一八四七〜一九一〇。海軍大尉。この時清国に派遣されていた。⑫「松村少将〔惇藏〕」一八四二〜一九一九。海軍少将。⑬「倪耘劬〔鴻〕」前掲の「支那漫遊日記」には「耘劬広西桂林人、現官福建、有文名」と述べられている。当時、輪船招商局に在職。

訳文 六日、黄浦江を溯った。黄浦江は一に申江ともいう。春申君がここを浚深して水運を利したと伝えられている。この川を黄とか申とかと称するのは、いずれも春申君に由来するのである。呉淞に着いた。たくさんの家屋が群がり取り巻く中、砲臺が土砂を盛り上げ、屹然と壁のようにそそり立っている。魏黙深が「呉淞の砲臺は、みな河口の外の海に面した要衝に置いているが、それはわざわざ的を立てて敵を招く結果になっている。すなわち、敵をして移動できる砲によって、固定した胸壁を攻撃することを可能にさせ、一方、我が方は逆に、固定した砲によって、移動できる船を撃つのである。故に敵は百発百中だが、我が方は十回撃つて九回は当たらない。砲臺を港内の、兩岸の追った所に移せば、我が方は移動できる砲によって、移動できる船を撃つことが可能になるだろう」と述べているが、今見たところでは、砲臺は海面から斜めに折れて、黄浦江上にまで連なっている。魏源に以上のような論があるからとて、増築する必要はないだろう。ここから川幅は四、五百歩になり、大小の汽船が数多く行き来するが、少しも妨げになる物はない。

正午ごろ上海に着いた。岸に浮板が設けられていて、それを通して艦内に入出入する。潮が満ちると、盛り上がって梯子となり、潮が引くと、平たく繋がって橋となる。岸田吟香氏が出迎えてくれ、共に広業洋行へ行った。広業洋行は北方の海産物を商っており、三井洋行は高島の石炭を商っている。大倉洋行は雑貨の転売を事とするもので、我が国の大商店である。広業洋行の上の階に宿所を与えられ、昼食をとり、二宮景輔氏を伴って公署へ行った。あいにく品川領事は不在で、呉碩・松延珪の

両書記に会った。

王紫詮氏を訪ねたところ、「手紙をいただいでから、日夜お待ちしておりました」と言ってくださった。曾根俊虎・品川の二氏が、松村惇蔵少将について立ち寄られた。私は倪耘劬氏と別室で筆談をしていたが、やがて酒が出たので、それらの諸賓客と酌み交わした。ところが、急にめまいに見舞われ、何度か吐いた。恐らく連日の船旅のため、精気がまだ回復してないのだらう。途中で辞して帰り、睡眠をとるとすぐに治まった。

原文 七日〔十四日〕朝陰。耘劬来訪。余爰閱其著『桐蔭清話』^①。故一見神契。出『山塘聽雨図卷』^②、徵余統和。問上海名流、曰胡公寿、揚（楊）佩甫、葛隱耕、袁翔甫、錢昕伯、萬劍盟、吳鞠潭（譚）、黃式權^③、而王君紫詮為第一流。

平野文夫^④来訪。文夫少游余門、卒海軍学科、為少尉、乘扶桑艦客此。楊君来要觀劇場。乃伴吟香・文夫及濯往觀。場広容千人、四架樓欄、中央設舞臺、煤燈爛燦、鼓板喧闐。演岳飛包拯商輅故事^⑤、及男女相悅雜戲。余不解華語、楊君自傍筆示大要、稍了一斑。夜半場散。

【注】①『桐蔭清話』全八卷。日本国内には、国立国会図書館に一八五八年出版のものがあるというが、未見。②『山塘聽雨図卷』山塘は蘇州虎邱の勝地。③「出『山塘聽雨図卷』、徵余統和」この時、鹿門が和した詩は『觀光游草』巻上に「題倪耘劬山塘聽雨図」という題で載っており、次のようなもの。「余嘗見耘劬桐蔭清話、紫翁坐話此事稱奇遇。次日示此図、求余詩。耘劬曾官蘇州、山塘為虎邱勝地。」一自風流婦虎邱、繁華不復說揚州。君詩亦似生公舌、吟到曾游石點頭。（虎邱有生公鞭石旧跡）／十里山塘綠掩藍、吳門故事我曾諳。請君呼起他年夢、一帶煙光好共探。（余就耘劬、謀蘇杭游）。④「胡公寿」胡遠（一八二三～一八八六）、字は公寿。文人画家。楊伯潤（一八三七～一九一一）、字は佩甫（夫）、書画家。葛其龍（同治、光緒間の人）、字は隱耕（畊）、詩文・掌故に優れていた。袁祖志（一八二

七（一八九八）、字は翔甫。袁枚の孫で、詩文を得意とした。錢徵（一八三二？）、字は昕伯、詩文を得意とした。萬劍盟は、楊逸撰『海上墨林』に「萬劍、字劍門、又字澗民、郵隰人。書法得《黃庭經》遺意。工詩文、有《鶴澗詩叢集》八卷」とある萬劍の誤りである可能性が高い。吳淦（一八二七？）、字は鞠潭、文章にたくみで、かつ書を善くした。黃式權（一八五三—一九二四または一九二五）は『申報』の主筆。⑤「平野文夫」？—一八九一。宮城県士族。当時、海軍少主計。⑥「岳飛包拯商輅故事」岳飛は南宋の忠臣。金との和平論者の秦檜と意見が合わず、投獄され死んだ。包拯は北宋の政治家。伝統的演劇等で清廉潔白な官吏の代表的キャラクターとなる。商輅は明代の政治家。

訳文 七日、朝、曇っていた。耘劬氏来訪。私は以前、氏の著『桐蔭清話』を読んだことがあった。だから、ひとたび会うや、意気投合した。耘劬氏は『山塘聽雨図卷』を出して、私に和韻を求めた。私が上海の名流を問うと、「胡公寿、楊佩甫、葛隱耕、袁翔甫、錢昕伯、萬劍盟、吳翰譚、黃式權。王紫詮氏が、その筆頭」ということであった。

平野文夫来訪。文夫は若くして我が門に入り、海軍の学科を卒業して少尉となり、軍艦「扶桑」に乗って上海に来て、滞在している。楊氏が劇場見物を誘いに来た。そこで、吟香氏・文夫・濯を伴い、出掛けた。劇場は千人収容の大きさと、四方に欄干が架けられ、中央に舞台が設けられている。ガス燈がまばゆく華やかで、拍子木の音がけたたましい。岳飛、包拯、商輅にまつわる物語や、恋愛ものなど、さまざま芝居が演じられた。私は華語が分からぬため、楊氏が傍らから大要を書いて示してくれ、それである程度分かった。芝居は夜半に跳ねた。

原文 八日〔十五日〕晴。出観市街、分為三界、曰法租界、英租界、米租界。每界三国置警署、邏卒巡街警察。沿岸大路、各国公署、輪船公司、欧米銀行、会議堂、海関稅務署、架樓三四層、宏麗無比、街柱接二鉄線、一為電信線、一為電燈線。瓦斯

燈・自来水道、皆鉄為之。馬車洋製、人車東製。有一輪車、載二人自後推之。大道五条、称馬路。中土市街、不容馬車、唯租界康衢四通、可行馬車。故有此称。市街間大路、概皆中土商店。隆棟曲櫺、丹碧煥發、百貨標榜、爛然炫目。人馬絡繹、晝夜喧闐。王夢微^①紀上海殷賑、曰「連街車馬、達旦笙歌、海水為沸」、真尺其狀者。

過書肆掃葉山房^②。挿架萬卷、一半熟書。偶閱生書、皆坊間陋本。有錢子琴所評『外史』^③。余曾見子琴、筆話不成語。吟香曰、「『外史』評成其師齊学裘之手。子琴三年前死、其妻無可食、屢求乞憐」。又曰、「中人漸用心東洋大勢、『東瀛詩撰』『朝鮮志畧』『安南國志』等書盛售」。

過樂善堂、晚餐。吟香曰、「紫詮教說頭痛、如不勝坐者。恐癘毒」。

【注】①「王夢微」王廷鼎（一八五二？～一八九二）、夢微はその字。免官後、多くの詩文を著した。②「掃葉山房」清代の代表的版元の一つ。

一九〇五年の科挙制度廢止後、無職の讀書人を筆工に使つて、廉価な石印本を大量に出版したことにより、一躍その名が知られた。③「錢子琴所評『外史』」錢樸（？～一八一？）、字は子琴。幕末期に來日し、長崎に五回渡航した。子琴は一八七九年、自ら評語を加えて、

頼山陽『日本外史』を上海説史堂から刊行した。④「余曾見子琴」前掲の「支那漫遊日記」には「余見子琴於東京」と述べられている。

⑤「齊学裘」一八〇三～一八七五在世。『海上墨林』卷三によれば、「字は玉谿、婺源の人。詩を能くし、書法に工」であった。⑥『東瀛詩撰』『朝鮮志畧』『安南國志』『東瀛詩選』は清末の學者俞樾が編んだ日本人の漢詩の選集。岸田吟香が日本の百数十家の詩集を俞樾のもとへ持ち込んだ。『朝鮮志畧』は『朝鮮史略』か。『安南國志』は前掲の「支那漫遊日記」では『安南志略』になっている。『安南志略』はベトナムの黎崱撰のベトナム古代史。ほぼ十四世紀三十年代に成書。一八八四年五月に岸田吟香経営の上海の樂善堂から銅活字本が出版された。

訳文 八日、晴。市街を見物に出かけた。市街は三界に分かれている。フランス租界とイギリス租界とアメリカ租界である。

三国がそれぞれに警察署を置き、邏卒が街を巡って警邏している。黄浦江沿岸の大通りには、各国の公署、汽船会社、欧米の銀行、会議堂、税関・税務署が三、四階建てで建っており、大きくきれいなこと、この上ない。街柱には二本の鉄線がつないである。一本は電信線で、もう一本は電燈線である。ガス燈、水道は、いずれも鉄で作つてある。馬車は西洋製で、人力車は日本製である。二人を載せ、後ろから押す一輪車もある。大道は五条で、馬路と称している。中国の市街は、馬車が通るだけの道幅がないが、租界だけは大通りが四通し、馬車の通行が可能である。故にそのように称されるのである。市街の大通りに並ぶのは、概ねいずれも中国の商店で、棟木が高く櫺が曲がつており、朱色と青緑色とが輝くようで、百貨の看板が鮮やかで目にまぶしい。人や馬がひっきりなしに行き来し、昼も夜も喧しい。王夢薇が上海の殷賑ぶりを「連街の車馬、朝まで続く笙歌、海水もために沸きかえる」と述べているが、真にその有様を尽くせるものである。

書肆掃葉山房に立ち寄つた。書架に並べられた萬巻のうちの一は、見慣れた書籍である。一部、見知らぬ書籍もあるが、見てみると、いずれも坊間の陋本である。錢子琴氏の評の付いた『日本外史』もあつた。私は以前、子琴氏に会つたことがあり、筆談をしたが、ちゃんとした話ができなかつた。吟香氏曰く、『日本外史』の評は、彼の師である齊学裘の手に成るものである。子琴氏は三年前に死に、彼の妻が食うに困り、しばしば憐れみを乞ひにやつて来た。また曰く、「中国人もしいに東洋の大勢に関心を向けるようになってきており、『東瀛詩撰』『朝鮮志略』『安南国志』等の書がよく売れている」と。

樂善堂に寄り、夕食を撰つた。吟香氏曰く、「紫詮氏が何度も頭痛を訴えておられ、座つてゐるのも大変なようだが、おそらく阿片の中毒だろう」。

原文 九日〔十六日〕張経甫〔煥綸〕・葛子源〔士澹〕・范蠡泉〔本礼〕・姚子讓〔文枬〕^① 來訪。談及洋烟流毒中土。余曰、「聞紫詮亦近喫洋烟」。子源曰、「洋烟盛行、或由憤世之士、借烟排一切無聊、非特誤庸愚小民、聰明士人、亦往往嬰其毒」。

午後、文夫導観扶桑艦。大砲四門、重十五噸、弾力達二三里之外。破裂丸大如斗。設機器注砲門。上層列砲八門、稍小。一砲連粧八丸。此属英人創巧者。槽上設將座、四囲皆鉄。繋電線伝号令。側設電燈、曰「能照三里」。下層為蒸汽器械。設二鉄柱、運転機輪、一進一退、不復勞転舵。四囲鉄板、吃水処、鉄厚踰尺。号令用旗幟、約束用符号、極為嚴肅。中法構難以後、各国発軍艦、巡視中土各埠。軍艦徒泊埠内、并我扶桑天城二艦、凡八隻。見松村少将、曰「法使方在天津、議安南事、和戦未決、将駛天城艦、往觀長江各埠」。留饗酒飯。将辞出、曰「盍觀樂隊奏曲」。既而樂隊整列、四人擊大小鼓、八人吹喇叭。其声悲壮。少将游学英国十年、専修海軍学科。我邦軍艦三十隻、皆少将所督。

【注】①「張経甫（煥綸）・葛子源（士濬）・范蠡泉（本礼）・姚子讓（文枬）」いずれも上海の正蒙書院と龍門書院の志子。この四人に孫照を加えた五人と岡鹿門との筆談録が、明治十七年の七月九日から十一日までの『郵便報知新聞』に「筆話」と題して連載されている。張煥綸（一八四六？～一九〇六）、経甫はその字。中国で最も早い私立の小学堂である正蒙書院を一八七八年に創始した。葛士濬（一八四八～一八九五）、子源はその号。『皇朝経世文統編』を編集した。范本礼（一八五四？～一八九四）、字は荔泉。「荔」と「蠡」は同音。姚文枬（一八五七～一九三三）は、民国後、衆議院議員になった。子讓はその字。駐日中国使館隨員を務めた姚文棟（字は子梁）の弟。

訳文 九日、張経甫（煥綸）、葛子源（士濬）、范蠡泉（本礼）、姚子讓（文枬）の諸氏が来訪。阿片の毒が中国じゅうに広まっているという話になった。私が「聞くところによると、紫詮氏も近頃、阿片を吸っていらつしやるようですね」と言うと、子源氏が言うことには、「阿片が流行するのは、あるいは世を憤る士が阿片の力で一切の無聊を排しようとするためということもあるのだろうが、愚かな下々の民のみではなく、聡明なる士人もまた往々その毒にかかっているわけだ」と。

午後、文夫の案内で扶桑艦を見学した。大砲が四門、重さ十五トン、弾き出す力は二、三里以上に達する。破裂丸は斗ほどとほすの太さ。機器が砲門に置かれている。上層には砲が八門連なっている。やや小さい。一砲に八丸が連ねて装填とほすされている。イ

ギリス人の創意工夫によるものである。櫓上に将座が設けられ、四囲はみな鉄である。電線がつながれており、それにより号令が伝わる。その傍らに電燈が設けられている。三里先まで照らすことができるという。下層は蒸気の器械で、二本の鉄柱が設けられて、ターピンを回転させ、一進一退、転舵を勞しない。四囲の鉄板の喫水線の辺りは、鉄の厚さが一尺を超えている。号令には旗幟を用い、互いの意思伝達には符号を用い、極めて嚴肅である。中・仏間に戦禍が起こつて以後、各国が軍艦を出動させて、中国の各港を巡視させているため、軍艦が港内に碇泊しており、我が国の扶桑・天城の二艦と併せて、全部で八隻である。松村少将に会つたが、「フランスの使節が今、天津にいて、安南の事について話し合っていると聞かされたが、和戦のいづれか未だ決しない。そこで、天城艦を馳せ、長江の各港を見に行こうと思う」と言い、酒と食事を馳走してくれた。辞去しようとする時、松村少将は「楽隊の演奏をご覧ください」と言った。やがて楽隊が整列した。大小の鼓を打つ者が四人、ラッパを吹く者が八人である。悲壮な楽音であつた。少将はイギリスに遊学すること十年、海軍学科を専門に修めた人であり、我が国の軍艦三十隻は、みな少将の監督するところである。

原文 十日〔十七日〕徐允臨・林曾來・楊誠之・王維圻、及其弟維勤・維藩來見。皆姚子梁学友^①。誠之曰、「今日接電信、急装赴天津」。子梁語余曰、「楊君好論五洲形勢。可与談」。此席匆卒一見為憾。

午後与二宮姓、訪品川領事。領事在任十年、買地郭外。竹籬茅舍、蕭然野趣。会不在、請茶一啜。帰路入夜、経英米二界。自江西路、沿岸右折、度第二橋。此為蘇州江。瓦斯電気二燈、爛然如昼。経吉祥街帰館。

【注】①「徐允臨」徐允臨は畫画家。この日の來訪者について、一八八四年七月一日の『郵便報知新聞』「文苑雅賞」所載の鹿門の「支那漫遊日記」には「十日。王維新維勤維圻徐允深林曾來見。皆梁田学友」とあり、林曾來ではなく、林曾賚という名が見える。林曾賚なら、

後の事になるが、一九〇六年冬に江蘇省で設立された法政団体の一つ、地方公益研究会の調査員の一人。なお、『郵便報知新聞』の上引の記事に見える他の人名表記は、必ずしも参考にならない。楊誠之、名は兆望。清末に外交官となり、ベルギーに使節として赴いた。王維圻（一八三七〜一八九〇）以下三人は、道光年間に上海で沙船業（大型平底の木製帆船による運送業）により一家を起した紳商、王文源（一七六一〜一八三三）・文瑞（一七六四〜一八三五）兄弟の曾孫の代の人物。維圻と維藩は文源の孫である慶堂の長男と三男。維圻は紹興・湖州等の厘局の総辦を歴任し、維藩は浙江海運滬局を二十餘年にわたり治めた。一方、維勤は文瑞の孫である慶勳の次男で、一八六七年に父親が死んだ後は、「意を仕進に絶ち、一に弟妹を教養するを以て務めと為した」という。姚子梁は前掲の姚文棟（一八五三〜一九二九）。

訳文 十日、徐允臨・林曾來・楊誠之・王維圻、及びその弟維勤・維藩の諸氏がやって来た。みな姚子梁氏の学友である。誠之氏が言うことには、「今日、電報があつたため、急いで支度をした。これから天津へ行く」と。子梁氏が「楊君は好んで五洲の形勢について論じる。ともに語るに足る人だ」と教えてくれた。今日の席が倉卒として、ひとたび顔を合わせるのみで終わったのが、残念である。

午後、二宮氏と品川領事を訪ねた。領事は在任十年、郊外に宅地を買つて（屋敷を構えて）いる。その竹籬茅舎は蕭然として野趣があつたが、不在であつた。茶を振舞つていただいただけである。帰路は夜になり、英・米の二租界を通つた。江西路から黄浦江岸に沿つて右折し、二つ目の橋を渡つた。その橋がかかっている川を蘇州江という。ガス燈と電燈とが光つていて、昼間のようであつた。吉祥街を通つて帰館した。

原文 十一日〔十八日〕与耘劬訪楊君、觀『古逸叢書』。楊君要余同游蘇杭。耘劬亦曰、「蘇杭不独富山水、実為人文淵藪」。

余病無舌人、楊齋在坐、曰「僕將取歸路蘇杭、不復煩舌人」。楊齋久住日東、善東語。乃訂期日。

与吟香訪曾根氏、方病。過本願寺、見僧孝純^①。坐有丸子姓^②、自福州經安徽浙（浙）江二省、至此、曰「武夷旧跡、今猶有朱子学舎、為道士居^③」。

夜与二宮平野二姓、散步市街。一楼標「洋烟」二字、待喫烟客。入觀。室史設毡丸場。丸斗大、觀者簇擁。左右為烟室。床上陳烟具。管長尺餘。兩人对臥、盆点小玻燈、拈烟膏管孔、且燎且噓。其昏然如眠、陶然如醉、恍然如死、皆入佳境者。二姓曰、「烟店大者、室垂繡帷、如王侯閨閣」。按洋烟之行、自雍正年間、其風日熾、勢不能禁、至道光、林則徐^④設嚴禁開刃覺^⑤、一敗塗地、遂解烟禁。猶禁在官人員、応試士子、及營兵喫烟、而衆視為文具、如無禁令。往年英国開国会、議禁洋烟販運、時郭崇燾^⑥為公使在英国、上書曰、「阿片之害不除、勢必將至尽中国之人、皆失其生理、稿頂黃馘、氣息綿綴、無異殘廢人。今英国知其毒為烈害、与中国受毒之深、相与設公会、謀禁止阿片販売。臣聞之大慙。請以三年為期、設法禁止^⑦」。朝議不決、至今日、未敢答英国。噫。

〔注〕①「過本願寺、見僧孝純」僧孝純は松林孝純（一八五六〜？）のこと。東本願寺の布教僧。兪樾の『東瀛詩選』編纂において、北方心泉と共に日本側との連絡係を務めた。②「丸子姓」一八八四年七月一日の『郵便報知新聞』「文苑雅賞」所載の鹿門の「支那漫遊日記」では「丸子潤」と記されているが、それ以上のことは未詳。③「武夷く道士居」朱熹が武夷山で講学したところを武夷精舎という。④「林則徐」一七八五〜一八五〇。官僚、政治家。イギリスによる阿片密輸の取り締まりを強行した。⑤「刃覺」国境での争いの意。具体的に、林則徐が一八三七年にイギリス商人たちの阿片を没収して焼き払い、これに怒ったイギリスの阿片商人が広州を攻撃し、イギリス本國も艦隊を出動させて、清國を攻撃したことにより始まった、いわゆる阿片戦争のこと。⑥「郭崇燾」一八一八〜一八九一。一八七六年、初代の出使英国大臣となった。西洋の科学技術を学ぶことを主張し、洋務運動を支持したが、頑固派の攻撃に遭い、官を辞した。⑦この上書は時の出使英国大臣郭崇燾が副使劉錫鴻とともに光緒三（一八七七）年に行ったもの。楊堅校補『郭崇燾奏稿』（岳麓書社、一九八

三年）に依拠すれば、ここでの引用文の原文と考えられるのは、同書所載の「請禁止鴉片折 附上論」の次の箇所。「吸食者日衆、勢将尽中国之人皆至失其生理、稿頂黃賊、奄奄僅存、無異殘廢。西洋人士知鴉片煙為害之烈、与中国受害之深也、相与設為公会、広勸禁止裁種販売。（中略）而於中国、為男女僱臥吸食鴉片煙之象、以取笑樂。臣甚愧之。（中略）宜先示限三年、責成督撫分飭州県、多制戒煙方藥。施散勸諭、以滿三年為期。」「稿頂黃賊」は『莊子』列御寇篇に見える語で、瘦せて肉のない首と黄ばんで憔悴した顔の意。

訳文 十一日、耘劬氏とともに楊氏を訪ね、『古逸叢書』を見せてもらった。楊氏は私にともに蘇・杭へ遊ばないかと誘ってくれた。耘劬氏もまた、「蘇・杭は山水に富むただけではなく、実に人文の豊かな所でもある」と言った。私は通訳のいないことを苦にしていたのだが、その場にいた楊齋氏がこう言ってくれた。「私が蘇・杭を通して帰省するから、わざわざ通訳を煩わす必要はない」。楊齋氏は久しく日本に住み、日本語を善くする。かくして期日を定めた。

吟香氏とともに曾根氏を訪ねたが、病中であった。本願寺に立ち寄り、僧孝純氏に会った。丸子という人が同席していた。福州から安徽・浙江の二省を経て、上海に来たといい、「武夷の旧跡には、今なお朱子の学舎があるものの、道士の住まいとなっている」ということを話した。

夜、二宮・平野の二氏と市街を散歩した。「洋煙」の二字を掲げ、阿片の吸飲客を待っている様があった。中に入って見てみた。部屋の中央に転丸場が設けられていた。丸は一斗くらいの大きさで、見る者が群がっている。左右にある部屋を煙室といい、ベッドの上に煙具が並んでいる。管は長さ一尺餘り、二人の人が向かい合って横になり、盆の上の小さな豆ランプを点じ、阿片膏を管の穴に詰め、燃やしながら吸ったり吐いたりする。昏然たること眠れるが如く、陶然たること酔えるが如く、恍惚たること死せるが如く、みなうつつりとしている。二氏が言うことには、「煙店の大きなものは、部屋に刺繡の帳を垂らし、王侯の寝屋のようだ」と。按ずるに、阿片の流行は、雍正年間からだんだん盛んになって、止めることのできぬ勢いを持つようになった。道光年間に林則徐が厳しい禁令を設けたため、国境での争いとなった。その結果、一敗地に塗れ、禁制を解いた。

在官の人員や科擧を受ける士子、及び兵士の吸引は禁じられたものの、衆は空条文と見なし、禁令はないに等しい。往年、イギリスの国会で阿片の仕入れ・運搬の禁止が議論された。その時、公使としてイギリスにあつた郭崇燾が、次のような内容の上書をした。「阿片の害が除かれなければ、中国人全体が生命を維持する機能を失い、瘦せて肉のない首と黄ばんで憔悴した顔となり、息も絶え絶えになつて、不具者と異なるところがなくなつてしまうこと、必定である。今、イギリスは、阿片の毒が烈害をなすことと、中国がその毒に深く侵されていることを知り、公会を設けて、阿片の販売の禁止を図っている。私はこのことを聞いて、ひどく恥ずかしく思う。向こう三年を期限として、法を設け禁止せられんことを請う次第である」と。にもかかわらず、朝議決せぬまま、今日に至り、未だイギリスに答えることができていない。ああ！

原文 十二日〔十九日〕従文夫觀城内。自小東門而入、市鄴雜沓、街衢狹隘、穢氣鬱攸、惡臭撲鼻。得城隍廟。門画人物、廟列塑像、香火薰灼。廟背東園、広數十畝、池水環流。一楼、曰「湖心亭」。石橋盤曲、曰「九曲橋」。池上列肆、鬻書画筆墨古器物、稍有雅致。唯不栽一卉木、無些幽趣。取別路、出新北門。

晩与濯赴紫詮之邀。劉子良^②・袁翔甫^③・姚賦秋^④・倪耘劬^⑤・錢昕伯^⑥來會。翔甫実隨園先生孫。問小倉山房、曰「已火」。問「隨園三十種」、曰「大版已亡」。隨園一代泰斗、名藉海外。而未三世、子孫飄零、遺著散逸。此為可嘆。紫詮有詩、与坐賓和答^⑦。

【注】①「城隍廟」都市の守護神を祭つた社。②「劉子良」「清代台東直隸州知州胡公鉄花紀念碑」の同治四（一八六五）年以後のことを述べた部分に「蘇撫劉子良」と見える。あるいはこの人物か。「蘇撫」は江蘇巡撫の略称。③「姚賦秋・倪耘劬・錢昕伯」いずれも『申報』初期の主筆。姚賦秋は布衣、錢昕伯は秀才の出身。④「隨園先生」詩人、袁枚（一七一六～一七九七）のこと。隨園はその別墅の名。⑤「小倉山房」隨園のこと。江寧（南京）の小倉山下に築かれたことにちなむ命名。⑥「隨園三十種」袁枚の著述を集めたもの。小倉山

房文集、小倉山房詩集、小倉山房外集、袁太史時文、小倉山房尺牘、隨園詩話など。⑦「紫詮有詩、与坐賓和答」この時の鹿門の詩は『觀光游草』巻上に「王紫詮招陪袁翔甫・倪耘劬・錢昕伯・劉子良・姚賦秋、紫詮有詩和答〔翔甫隨園先生孫〕」という題で載っており、次のようなもの。「一醉論交月下欄、沈沈清夜漏籌闌。廿年心折倉山集、相見莫為門外看。／＼織纖眉月照危欄、銀燭飛觥酒興闌。到底隨翁真解事、不如痛飲使余看〔隨園詩曰、有酒余不飲、無酒余不飲。不如招飲客、痛飲使余看。是席余酒半眩暈、不欲飲故云〕」。

訳文 十二日、文夫の案内で城内を見て回った。小東門から入ると、店舗がひしめき、通りは狭隘で、汚い臭気が立ち込め、悪臭が鼻につんと来る。城隍廟があった。門には人物が描かれ、廟には塑像が並び、線香の火がくすぶっている。廟は東園を背にし、広さ数十畝、池の水が環流している。湖心亭という楼があり、そのそばのジグザグに連なる石橋は九曲橋という。池のほとりに並んだ店には、書画・筆墨・古器物が売っており、やや雅趣がある。ただ、廟内には一本の草木も植えられておらず、いささかの奥ゆかしさもない。別の道を取り、新北門から出た。

一晩は濯と、紫詮氏の招きに応じて出かけた。劉子良・袁翔甫・姚賦秋・倪耘劬・錢昕伯の諸氏もやって来た。翔甫氏は、かの隨園先生の孫である。小倉山房について尋ねると、「焼けてしまった」とのこと、『隨園三十種』について尋ねると、「大版はなくなってしまった」とのことであった。隨園は一代の泰斗で、海外にもその名が知られている。にもかかわらず、三世にも達せぬうちに、子孫が落ちぶれ、遺著が散逸している。嘆かわしい事である。紫詮氏が詩を詠み、同席している客人たちと応酬した。

原文 十三日〔二十日〕我邦風化、皆源于中土。故中土風俗、与我出入。今此举一二。凡中人始相見、先問姓名、次問鄉貫、次問父母兄弟具在、次眷族多少、次年庚幾何。逢人、問食否、蓋問安否之義。作東牘累番、先書紅箋。有喪者、名刺用白紙、

経時月貼白紙。食具服類、見一異品、必問価幾何。賓至必進茶。賓下（不）輕飲、待將起而一啜、主見之為送賓之虞。尤重婚葬、互夸資贈之侈葬儀之盛、往往破産。

訳文 十三日、我が国の風教は、みな中国に源がある。故に中国の風俗は、我が国と似通つたところがある。ここに一二の例を挙げてみよう。凡そ中国人は初対面の際は、まず姓名を問い、次に出身地を問い、次に父母兄弟の有無を問い、次に親族の多少を問い、次に年齢を問う。人に会うと、食事を済ませたか否かを問うが、これは安否を問う意味が込められているのだから。書簡をしたためることが何度にも及ぶときは、まず赤い箋紙に書く。服喪中の者は、白紙の名刺を用い、月日が経つと白紙を張る。食器や服の類は、珍品を見かけたら、必ず値段を問う。客が来ると必ず茶を進める。客が軽々しく飲まず、立ち上がる前に啜つたら、主はそれを機に客を送り出す心づもりをする。極めて婚儀・葬礼を重んじ、互いに贈り物の豪華さと、葬儀の盛大さを誇り、往々にして破産に至る。

原文 十四日（二十一日）文夫来話曰、「我邦軍艦大砲操練、航海測量、不雇一外人。中土軍艦、機関運転、一雇外人。一旦有事、各国中立、外人不敢致力。凡百機関、不可得而運転。凡軍艦有軍礼、吉凶節時、互通使問、符号約規、各国一律。扶桑艦之入呉淞口、発砲廿一、祝皇帝之寿、而砲臺不応発。遣人問故、不見一将校。見道臺^①問是事、直曰、『欧米軍艦、無行是礼者』。蓋中土不講軍礼、故各国亦外之也」。中人開口、輒曰、「夷狄殊類、不知礼義」。自外人而觀之、為孰知礼義。其致今日之事、実有故也。

【注】①「道臺」府県を監督する清朝の地方官。省の下に置かれた行政単位「道」の責任者。

訳文 十四日、文夫が来て、こんな話をした。「我が国の軍艦は、大砲の操練、航海の測量に、外国人は一人も雇っていないが、中国の軍艦は、機関の運転をすべて、雇った外国人任せにしている。有事の際には、各国は中立し、外国人は力を貸そうとはしないから、すべての機関が運転できなくなる。凡そ軍艦には軍礼があり、吉凶や祝賀・記念すべき事柄のある時には互いに挨拶を交わすことになっており、その際の符号・規約は各国一律である。ところが、扶桑艦が呉淞口に入った時、二十一発発砲して、皇帝の寿を祝したにもかかわらず、砲臺はこれに応じる発砲をしなかった。その理由を問い合わせるべく人を遣わしたが、一人の将校にも会えなかった。道臺に会って、この事を尋ねたものの、ただ『欧米の軍艦には、この軍礼を行うものがない』との返答であった。思うに、中国が軍礼を講ぜざるが故に、各国もこれを疎んじているのだろう。中国人は口を開けば、「夷狄殊類は礼義を知らない」と言うが、外国人から見れば、礼義を知らぬのは、どちらであろうか。中国が今日のような事態に陥っているのには、まことにしかるべき理由があるのである。

原文 十五日〔廿二日〕耘劬伴一客至。杜邠農〔西鳴〕^①、出示擘窠大字十数葉字極奇異。曰「仿北魏碑板」^②。蓋康熙乾隆二朝、專學董其昌^③、朝野欽然。唯董法之師、至今漸屬陳腐、爭為古怪。此亦可以見世變也。

張經甫遣价來迎。經甫憂蒙養無法、設書院、待來學者。生徒百餘名、彬彬嚮學。学舎新築、楼上舍生徒、楼下為講堂。嚴立学規、率之以躬行。葛・姚・范三氏來會、歷問東土風俗、政体、及海外大勢。已〔已〕而延別室、供点心。二宮姓及濯追踵、環座擁卓、各手一枝筆、暢談終日。雨至、經甫命轎送還。辭之不可。

【注】①「杜邠農〔西鳴〕」廣東人で、書法にたくみであり、上海に居住して藝を嚮いたという。②「擘窠」大きな文字を書く方法。大きな筆

を親指の引つ込んだ所に入れて握って書くこと。転じて、大きい字。③「碑板」碑碣に刻まれた文字。④「董其昌」明代の文人画家、書家。

訳文 十五日、耘劬氏が一人の客を伴ってやって来た。杜邠農（西鳴）という人で、擘窠の大字十数葉を出して見せた。極めて奇異な字で、「北魏の碑板に倣った」ということであつた。思うに、康熙・乾隆の二朝の人々は、専ら董其昌を学び、その点、朝野軌を一にしていた。しかし、董法を教える師匠は、今ではしだいに陳腐になってきており、争つて古怪な書風を追うようになってきていたのである。ここにもまた世の中の変化を見ることが出来る。

張経甫氏が使用人を寄越し、迎えに来た。経甫氏は子どもの教育に手だてが講じられていないのを憂い、書院を設け、入学者を受け入れている。百餘名の生徒がいて、彬々として学問に励んでいる。学舎を新たに築き、階上には生徒を寄宿させ、階下を教室にしている。厳しい規則を設け、躬行により生徒を率いている。葛子源・姚子讓・范蠡泉の三氏も来て、一緒になつた。日本の風俗、政体、及び海外の大勢について次々に質問された。やがて別室に案内され、点心を御馳走になつた。後から来た二宮氏と濯も卓を囲み、各々一本の筆を手にして、終日歓談した。雨が降り出したため、経甫氏が轎を命じ、我々を送り返してくれようとした。断つたものの、聞き入れてくれなかつた。

原文 十六日〔廿三日〕平野・武田〔秀雄〕^①二姓、導観米国軍艦。一将校出接、見余名刺、曰「聞日東学士、来游上海。先生之謂乎」。蓋記『申報』所載、「日東文豪某、携著書千卷、為中土山水之游」語也^②。其用心外事、可知。導観艦内、歷示大小砲蒸氣機関用法。更至法艦。陳大砲十五門、瑩然如新発硯^③。陳野戦砲無數。其人曰、「中法発大臣、議訂安南条約^④。不聽我言、則有戦耳」。二姓熟英語、応答畧無窒滞。我邦設各科講欧学。後進輩出成器、駛大艦粧巨砲、与欧米各国、抗礼講交、彼亦以

艦内を案内し、大小の砲と蒸気機関の使用法を説明してくれた。さらに、フランス艦も見に行った。大砲十五門が並び、光り輝いていて、研ぎたての刀のようであった。無数の野戦砲も並んでいた。説明者の言うことには、「中・私は大臣を遣わして、安南条約を議定させた。我々の言い分に従わなければ、戦をするしかない」と。平野、武田の二氏は英語に習熟しており、応答にいささかの滞りもない。我が国は各科を設けて欧米の学問を講じている。後進が輩出して一人前になり、大艦を馳せ巨砲を取り付け、欧米各国と対等の交際をするようになれば、欧米各国も友朋国として相對してくれるだろう。これは大いに国家のために喜ばしいことである。

公署へ行き、呉・松延の二氏に会い、蘇・杭への旅行計画を告げ、護照を請うた。

原文 十七日〔二十四日〕抵龍門書院^①。葛・姚二氏出迎。書院本李氏家園。応敏齋〔宝時^②〕為道臺時、買為書院、以待四方士子。有泉石之勝。竹樹蕭洒、亭臺雅潔、畧似我邦禪刹。堂壁錄朱子「白鹿洞掲辞」^③。其設科、一以經史、宋学為主。延一間室、供点心、贈劉融齋〔熙載^④〕著書六種。敏齋創書院、聘致融齋、督学政。弟徒慕德、祠于学。嚴梟香〔文藻^⑤〕贈家著数種。是夜在埠邦人、張宴咸和館、饒品川領事。往会。東妓弄絃、歌呼酣醺。頓為在郷之念。

【注】①「龍門書院」道臺の丁目昌が一八六五年に上海に創設し、初めは他の学堂を借用して教学を行っていたが、その二年後に道臺の応宝時が銀一萬兩を支出して、吾園（現在の尚文路龍門村）に講堂、樓廊、学舎四十一間を建設した。②「応敏齋〔宝時〕」応宝時。敏齋はその字。道光から同治にかけての人。③「朱子「白鹿洞掲辞」」「白鹿洞掲辞」は、正しくは「白鹿洞書院掲示」。朱熹が、現在の江西省廬山五老峰の麓に再建した白鹿洞書院のために定めたもので、朱子学の教育理念の精髓と言えるもの。④「劉融齋〔熙載〕」劉熙載（一八一三―一八八一）、融齋はその号。小学家、文学者。官は左中允まで至ったが、後、龍門書院の講義を担当して、一生を終えた。その

著のうち、『藝概』『昨非集』『四音定切』『持志塾言』『説文双声』『説文疊韻』を「古桐書屋六種」という。⑤「嚴梟香〔文藻〕」未詳。

訳文 十七日、龍門書院へ行った。葛子源・姚子讓の二氏が出迎えてくれた。書院はもと李氏の家の庭であつたが、応敏齋〔宝時〕が道臺であつた時、買い取つて書院とし、四方の生徒を受け入れたのである。泉と岩石の優れた眺めがあり、竹は清く、亭や臺は優雅で清潔で、やや我が国の禪寺に似ている。堂の壁に朱子の「白鹿洞掲辞」が写されている。学科の編成は、經史と宋学を主としている。一室に案内され、点心を振舞われ、劉融齋〔熙載〕の著書六種を贈られた。敏齋は書院を創設後、融齋を招聘して学務を統轄させた。生徒たちが融齋の徳を慕い、校内に祀っている。嚴梟香〔文藻〕に家伝の著作数種を贈られた。

この夜、当地在留の邦人が咸和館で宴を張り、品川領事を饒別した。出向いて参加した。日本人藝者が爪弾く弦の音に合わせて高吟し、かなり酔い、にわかに母国にいるような気持ちになつた。

原文 十八日〔廿五日〕見惺悟〔吾〕・惕齋、商議游事。惕齋導過葉氏葉肆。見董慎夫〔圻〕^①。現官中翰^②。梟香至、曰「家伯芝僧在家以待」。伴至求志書院。中土州県、皆有書院。大官巨姓、所以捐貲建設。芝僧出見、饗酒、曰「方草『桐城県志』」^③。贈刻本三卷。市街隘陋不潔。唯所陳貨物、皆精良。見一朱匣。板厚四五寸、豎六尺餘、横二尺餘、両頭刻獸。問之、始知其為凶器。中土厚葬為弊、可知也。

【注】①「董慎夫〔圻〕」未詳。②「中翰」清代の内閣中書。③「芝僧」嚴辰（一八二二〜一八九三）。縉生、または芝僧と号した。浙江省桐郷の人。刑部で勤めた後、故郷に帰つて講学した。編著に『桐郷県志』などがある。④「求志書院」俞樾が主宰した書院。⑤「桐城県志」

『桐郷県志』の誤りと考えられる。『光緒桐郷県志』と題する光緒十三（一八八七）年の刻本がある（『中国地方志集成 浙江府県志』輯23、上海書店、一九九三年）。

訳文 十八日、惺吾氏と惕齋氏とに会い、旅行のことを相談した。惕齋氏の案内で葉氏の薬肆に立ち寄った。董慎夫（圻）氏に会った。今、中翰に勤めているとのこと。晁香氏が来て、言うことには、「伯父の芝僧が家で待っている」と。晁香氏に連れられて求志書院に着いた。中国の州・県には、みな書院がある。大官や名士が財産を抛出して建てたものである。芝僧氏が出てきて、酒を振舞ってくれ、「今『桐城県志』を書いてるところだ」と言い、刻本三巻を贈与してくれた。市街は非常に狭苦しくて不潔だが、陳列されている商品は、みな精良である。朱色の箱を見かけた。板の厚さ四、五寸、縦六尺餘、横二尺餘で、両端に獸の絵柄が刻み込んである。尋ねてみて、それが棺桶であることが分かった。中国では厚葬が弊害となっているというが、もつともと思つた。

原文 十九日〔廿六日〕朝雨。公署給経蘇杭（杭）至寧波、護照一通。条掲公埠以外、不得買物、恪守国法等十三件。鶴田姓請余跋李中堂書^①。乃書曰、「有為之士、不留心末藝。今見伯相書、不似今能書人、摹晉仿唐。此伯相所以為伯相也歟」。或曰、「世多伯相書、多出門客手」。

【注】①「李中堂」李鴻章（一八二三～一九〇一）。

訳文 十九日、朝、雨。公署から、蘇州・杭州を経て寧波に至る護照一通を支給された。公埠以外では物を買ってはならぬ、

謹んで国法を守れ等、十二か条が書き連ねられていた。鶴田氏から、李中堂の書に跋を書くよう頼まれた。そこで、こう書いた。「有為の士は、心を末藝に留めず。今 伯相の書を見るに、今の能書の人に似ず、晋を摹し唐に仿えり。此れ伯相の伯相たる所以ならんか」と。なお、世間に伯相の書と言われるものは多いが、多くは門客の手に成るものという。

原文 廿日〔廿七日〕晨起、抵公署、見安藤領事^①。過紫詮・吟香告别。松延氏来訪、曰「昨有公命召還」。吟香来、出酒別酌、曰「本願寺僧無適、寓杭弥勒寺。杭有西湖名勝。盍謀此僧、為小留消夏之計」。作書介無適。遣濯候楊氏曰、「今夜乘船以待」。二宮・平野・島田〔友春〕^②三姓助理行李。此游旧故送迎、到处如帰、不復知為殊域遠客。夜熱如蒸。

【注】①「安藤領事」安藤忠経、通称太郎（一八四六―一九二四）のこと。外務省、農商務省の局長等を歴任した。この当時は上海領事。②「島田〔友春〕」島田友春（一八六五―一九四七）は明治から昭和にかけての浮世絵師、日本画家。一八八四年六月に清国に渡り、上海で銭吉生・沈心海に師事し、人物画を学んだ。

訳文 二十日、朝起きて、公署へ行き、安藤領事に会った。紫詮氏や吟香氏にもお目にかかり、別れの挨拶をした。松延氏が来訪、「昨日、公命があり、召還されることになった」と言った。吟香氏が来て、酒を出して別れの盃を酌み、「本願寺の僧無適氏が、杭州の弥勒寺に寓している。杭州には西湖という名勝もある。無適氏と相談して、しばらく滞在し避暑でもしてはどうか」と言って、無適氏への紹介状を書いてくれた。濯を楊氏のところへ行かせ、「今夜船に乗って待つことにする」と伝えさせた。二宮、平野、島田友春の三氏が旅支度を整えてくれた。このたびの上海滞在は、旧友たちが送迎してくれ、至る所で我が家に帰ったかのように、異域の遠客ということを意識させられなかった。蒸し暑い夜だった。

蘇杭日記

原文 序

日本鹿門岡君今之豪俠士也。少有用世之志、好読経世書、上下千古、意氣激昂^①。時為天下画奇計、纏纏千言、值幕府帰政、国内騷擾、君在奥羽、争藩主之主盟約、節行益著。檄朝下而夕行、慷慨就道、絶無難色、卒排群議、有所建立。而竟不得行其志、天也。平生尤留心史事、摭拾前後事實、成一家言。曾築野史亭於鹿門山下、閉門授徒、曉心大義、及門多幹材。後移居東京、以書史自娛。

余於己卯春、作東瀛之游、始見君於蓮池酒亭^②、辱技縞紵往來無間。浮舟瀟水、連輿晃山、抵掌劇談、輒及五洲大勢。君以一書生、睥睨当世、眇視朝貴。其志可謂大矣。余独惜其不能見用於世也。然君鬱勃壯氣、不以是少衰、平生不欲齷齪於一島域、意將南極粵嶠^③、北抵燕郊^④、瞻皇居之壯麗、攬都邑之崇闕、尽交其賢豪長者。此約已五年、而今日始得一踐。君知余已〈己〉回吳中、改道滬濱、冀得先見顔色。交友之誠、如君者蓋亦罕矣。君既已〈己〉買舟游蘇杭、徘徊稽山鏡水之間、訪朱舜水之後裔、与之留連往復。繼質西湖僧刹、安頓茱書、將為消夏之計。会法虜跋扈、風鶴頻驚。滬上友人以書促之、匆匆過返。以不遍搜吳越諸名勝、為此游憾事。今將往游京師。京師為戰國燕趙之地。不知有慷慨悲歌之士、混迹屠估走販者否。余老年多病、日事閉関習静、百步之外、嗒然若喪、不能從君一游。慨然書此、以送、冀君必有所遇也。

光緒十年甲申秋八月七日^①

天南遯叟^②王韜拜手

【注】①「好読経世書、上下千古、意氣激昂」明末の陸紹珩の『醉古堂劍掃』の「匡坐一室、上下千古、明目快心以蕩滌胸中之抑塞者其唯読書乎」を踏まえている可能性がある。②「築野史亭於鹿門山下」野史亭は岡鹿門の書齋、草私史亭のことと思われる。草私史亭が完成したのは、元治元（一八六五）年の年末。鹿門山は仙臺の瑞鳳殿（仙臺藩祖伊達政宗の廟所）のある山、御霊屋山。現在も「鹿落坂」（青

葉区靈屋下と太白区向山にまたがる坂道)の名が残っている。③「己卯」ここでは、一八七九年のこと。④「蓮池酒亭」王韜の『扶桑遊記』によれば、彼が初めて鹿門に会ったのは、一八七九年五月十七日、東京久保町にあった「売茶亭」という名の料亭においてであった。売茶亭については、服部誠一の『東京新繁昌記三編』(一八七四年八月刻成)に「売茶亭は戊辰年間に興り、群亭を圧伏して松田久保坊に跋扈す。災後更に巨大の洋風館を起こして、亜細亜歐羅巴の両風味を併呑す。(兼ねて西洋料理を為す)」とある。場所は今の港区新橋一丁目付近。これと蓮池酒亭との詳しい関係等については未詳。⑤「粵嶠」五嶺以南の地域。五嶺とは、大庾嶺・越城嶺・騎田嶺・萌渚嶺・都龐嶺の総称。江西・湖南・広東・広西四省の間に位置し、長江と珠江流域の分水嶺。⑥「燕郊」北京、河北省一带。⑦「鏡水」紹興県の南の鏡湖か。⑧「朱舜水」名は之瑜(一六〇〇～一六八二)。明の余姚(浙江省)の人。清兵が南京を陥れるに及んで、舟山に退いて援兵を日本に乞うたが、ついに亡命して徳川光圀に仕えた。安積澹泊が入門し、木下順庵や山鹿素行も師事した。舜水は日本に来てからの号。⑨「慷慨悲歌之士、混迹屠沽走販者」『史記』刺客列伝の荊軻についての記事が、表現の下敷きになっている。⑩「嗒然若喪」『莊子』齊物論の「南郭子綦隱机而坐、仰天而嘘、荅焉似喪其耦」に基づく表現。⑪「光緒十年甲申秋八月七日」陽暦では一八七九年九月二十五日。⑬「天南遯叟」王韜の号。

訳文 日本の岡鹿門氏は、現代の豪侠の士である。若い時から、世に用いられんと志があり、好んで経世の書を読み、千古と今に思いを巡らし、意気が激昂するのであった。その頃ちよūd、天下のために奇計を画策し、千言を連ねた。幕府が政権を朝廷に返すに当たり、国内が騒擾していた時、氏は奥羽にあって、奥羽越列藩同盟の盟主となろうとする藩主と争い、その節操ある行いがますます世に知られた。佐幕決定の檄が下るや実行に移されると、慷慨して獄に下り、まったく非難がましい態度は見せなかつたが、結局群議を排して、建立するところがあつた。にもかかわらず、最後までその志を行うことができなかつたのは、天命である。平生、歴史上の出来事に関心を持ち、前後の事実を拾い集めて、一家言を成した。以前は鹿門山下に野史亭を築き、門を閉じて門弟に教授し、大義を心にさとらせた。門下に至る者には才能のある者が多かつた。その後、

東京に居を移し、典籍をもって自ら楽しんだ。

私は己卯の春に日本へ旅し、初めて蓮池酒亭で氏に会い、かたじけなくも贈り物を頂戴し、隔てのない交際をした。隅田川に舟を浮かべ、日光に車を連れ、掌を撃つて心置きなく話し合うたびに、話は五洲の大勢に及んだ。氏は一書生の身をもって当世を睥睨し、朝廷の権貴をも軽く見ていた。大きな志を持っていたと言える。私は氏が世に用いられなかったことを惜しむのである。とはいえ、氏の鬱勃たる壮志は、そのことによつていささかも衰えなかった。平素から一島域に齷齪としているところを欲せず、南は粵嶠を極め、北は燕郊に至り、皇居の壮麗なさまを見、都市や村々の大きさも見取り、それらの地のあらゆる賢豪長者と交わろうと誓っていた。その誓約はすでに五年たつて、今ようやく実行に移されることになった。氏は、私ですでに呉に帰っていることを知ると、予定を変更して上海に来て、まず私に会うことを望んだ。交友の誠実さという点で氏ほどの人は稀であろう。氏はすでに舟を雇つて蘇州・杭州に遊び、稽山・鏡水の間を徘徊し、朱舜水の後裔を訪ね、彼らと何度か行き来した。次いで西湖の寺を借り、琴書を置いて、避暑をするつもりであったが、その頃たまたまフランス軍が跋扈し、戦争の気配にしばしば不安な気持ちになった。上海の友人が書簡を送つて促したため、直ちに上海に帰つてきた。呉越の諸名勝のすべてを訪ねることのできなかつたことが、今回の旅の遺憾なことだという。

今は京師に出掛けようとしている。京師は戦国の燕趙の地である。屠殺業者や酒屋に身をやつした、慷慨悲歌の士が今でもいるのだろうか。私は老年で病気がち、毎日、門を閉じて静かな生活を送るのだけが日課である。すっかり弱つてしまい、氏に付きしたがつて旅をすることはかなわない。慨然たる気持ちでこの文章を書いて送り、氏が必ずいい出会いに恵まれるよう、冀う次第である。

光緒十年甲申秋八月七日

天南遯叟王韜拜手

原文 序

甲申五月鹿門岡先生將遊清國。余在甌島、贈書約錢先生瓊浦。先期余搭輪船金龍号至瓊浦。瓊浦西海大港、巨商列肆、翠樓

凌雲、漢人欧客之居、出没于林樾陵埠之間。山水之觀、風月之勝、蓋与楊（揚）州西湖畧相類。既而先生至。余邀津上一樓、举杯属曰、「壯哉遊也。本邦維新以來、外交日闢、縉紳官兔、往往觀風於殊域。然而其以文学遊清国者、自先生而始焉。」

先生少時游昌平。会幕府末造、慨然倡大義、以挽回衰運自誓。与松本奎堂・松林飯山諸人深相結、将有大所為。奎堂・飯山皆僵国事。先生悒鬱不樂、著書排悶。王政革新、先生擢為大学助教。時余為生員、旦夕過從。後七八年又見先生於東京。会清国遣公使何子我・副使張魯生於我國、王紫詮亦來游。余幸列諸名士之末、与清客游。詩酒徵逐、談論激昂、懽然無所間、以適天下之樂。然而紫詮西歸、余亦官游薩摩、子我・魯生諸人任滿而歸。余在西海、索居無聊、追懷往時、恍如夢寐。今又餞先生此遊於萬里極浦之上。感慨果為如何。

先生行矣。先生此行、山則望終南・太華之秀且高、水則觀黄河・長江之大、洞庭・彭蠡之広。与其朝士大夫游從、上下其議論、則將見清国伝先生文名。又猶昔時李白・王維諸人、於晁衡・吉備諸人也。

明治十七歲次甲申五月 信濃 丸山鑽子堅

【注】①「松本奎堂・松林飯山」松本奎堂（一八三二―一八六三）は三河刈谷藩士。昌平齋で学んだ。文久三年、天誅組を組織して、藤本鉄石・吉村虎太郎とともに総裁となり、大和五条で挙兵したが、同年九月戦死した。松林飯山（一八三九―一八六七）は肥前大村藩儒。昌平齋で学んだ。文久二年、大坂で奎堂・鹿門とともに双松岡塾を開いた。慶応三年、佐幕派藩士に暗殺された。②「大学助教」鹿門は一八七〇年、仙臺から上京して、大学中助教に就任した。③「公使何子我・副使張魯生」何如璋（一八三八―一八九一）。子我はその字。清国の初代駐日公使。張斯桂（一八一六―一八八八）。魯生はその号。清国の初代駐日副使。④「終南・太華」終南は陝西省にある終南山。太華は陝西省にある華山のことか。⑤「洞庭・彭蠡」洞庭は湖南省北部にある洞庭湖。彭蠡は江西省北部にある鄱陽湖のこと。⑥「李白・王維諸人、於晁衡・吉備諸人」晁衡・吉備は、それぞれ遣唐留学生として渡唐した阿倍仲麻呂と吉備真備。特に阿倍仲麻呂が李白・王維ら、唐の詩人と交流したことは、よく知られている。

訳文 甲申五月、岡鹿門先生が清国へ旅立とうとされた際、私は鹿兒島にいて、手紙を送って、長崎で先生を饒別せんことを約した。その期日に先んじて、私は汽船「金龍丸」に乗り、長崎に着いた。長崎は西海の大きな港で、大商人が店を連ね、高樓が雲を凌ぎ、漢人・欧客の住まいが林や丘の間に見え隠れし、山水の眺めや風月の素晴らしさは、揚州や西湖に類するものである。やがて先生がお着きになった。私は埠頭の近くのある樓に先生をお招きし、杯を挙げて、こうお願いした。「先生のご旅行は壮挙というほかはありません。本邦は維新以来、外国との行き来が日に日に広がり、官歴のある人物や現役官吏が往々にして異域の人情風俗を観察しに出掛けております。しかし、学藝に携わる立場で清国に出掛ける方は、先生が初めてです」。

先生は若い時、昌平齋に遊学された。幕府の末期に際会するや、慨然として大義を唱え、衰運を挽回することを自ら誓われた。松本奎堂・松林飯山をはじめとする方々と深く相結び、大いなる働きを成し遂げようとされた。ところが、奎堂と飯山は国事に身を殉じ、先生は鬱鬱として樂しまず、書を著して憂さを晴らされた。王政復古となるや、先生は大学助教に拔擢された。時に私はその在學生で、朝晩訪問した。その後、七、八年たつて、再び先生に東京でお目にかかった。その頃たまたま、清国から公使の何子襄氏と副使の張魯生氏が我が国に派遣され、王紫詮氏も来遊された。私も幸い諸名士の末席に連なり、清国からの客人と交遊した。詩や酒で招き招かれて、談論激昂し、喜ばしい気持ちで打ち解け、天下の楽しみに適うものであった。やがて紫詮氏は西に帰り、私も薩摩の職場に戻り、子襄氏と魯生氏らは任滿ちて帰国された。私は西海にあって、孤独な暮らしを送っていて樂しみが無く、往時を追懐すると、恍として夢寐のようであった。今また萬里のはるかに遠い海辺の町から先生の今回の旅に饒をするようになった。この感慨を一体何と言えはいいだろう。

先生、旅立たれよ。先生の今回の旅は、山は終南・太華の秀でて且つ高いさまを眺め、水は黄河・長江の大きなさまと、洞庭・彭蠡の広いさまとを見ることになられるであろう。また、中国の士大夫と交際して、意見をやり取りされれば、清国に先

生の文名が伝わることになるであろう。昔、李白や王維らによつて阿倍仲麻呂や吉備真備の名が伝わったように。

明治十七歲次甲申五月 信濃 丸山鑽子堅

観光紀游卷二

岡千仞振衣 撰著

宮城県

姪 濯萬里 校訂

蘇杭日記卷上

原文 是游本擬首抵福州見何子峯、而後游四方。會揚（楊）君惺悟（吾）將游蘇杭、曰「子盍先蘇杭而後福州」。余曰、「從名士為勝地之游、百年難復得者」。同舟溯吳淞江、探吳中諸勝。小留蘇州出杭州、度錢塘江、歷訪蘭亭・禹陵・天童諸旧蹟^①。歸杭州、借寺小寓。聞鷄籠之變、勿皇帰棹。無幾有福州之變^②、造船局罹兵火、子峯僅保一命。事固有不可知者矣。

【注】①「蘭亭・禹陵・天童諸旧蹟」蘭亭は紹興市の市街西南十四キロメートルの蘭渚山の麓にある。東晋の書家王羲之がここで行った修禊の模様を記した「蘭亭集序」で有名。禹陵は紹興市の東南四キロメートルにあり、伝説上、夏王朝の創始者禹の陵墓とされている。天童は天童寺。②「鷄籠之變」「福州之變」清仏戦争において天津条約が締結されたにもかかわらず、この条約はフランス本国においても北京政府においても歓迎されず、清仏両軍はまたもや衝突して、事態は再び悪化した。フランス本国政府は清朝咸圧の方針をもって臨むことを電命し、提督クルペーの命を受けた海軍少将レスパスが八月五日、臺灣の基隆（鷄籠）港を砲撃し、これを沈黙させたが、陸戦隊は清兵に破れた。これを鷄籠の變という。ここに至つて、クルペーは福州攻撃の計画を定め、八月二十三日に戦闘を開始し、二十八日

に陥落させた。これを福州の変という。

訳文 この旅はもともと、まず福州へ行って何子襄氏にまみえ、それから四方を回るつもりだったのだが、たまたま、蘇州・杭州方面へ行こうとしていた楊惺吾氏が「まず蘇・杭へ行き、福州は後回しにしないか」と持ち掛けてくれたため、私も「名士に付きしたがって名勝の地を見て回るのは、百年に一度もないことだ」と返した。舟に同乗して呉淞江を溯り、呉の諸名勝を探訪し、しばらく蘇州に滞在してから、杭州に出、銭塘江を渡って、蘭亭・禹陵・天童の諸旧蹟を歴訪し、杭州に帰って、寺を借りてしばらく仮住まいしていたところ、鷄籠の変のことを聞いたため、急ぎ船で上海に戻った。その後、いくばくもなくして福州の変が起こった。造船局が戦火を被り、子襄氏はかろうじて一命を保ったという。事には不可知の面があるわけがある。

原文 六月廿一日〔五月廿八日〕過蔡同德藥舖^①、促惕齋同發。二宮・高平〔与一〕^②・島田・今村〔勝太〕^③四姓、送至岸上。是為吳淞江、俗称蘇州江。揚〔楊〕君已〔已〕在。舟長三丈餘、設案卓椅子、置臥牀二所、窓嵌玻璃、扁曰「鼓浪長風」、極為雅潔。船老叩鉦拜天、火紙丸、爆然有声。蓋表告天之意也。黃浦大江、大艦巨舶所繫。而吳淞支流、船隻候潮往來。兩岸皆市街、矗立高廈、列設電燈・瓦斯燈・製絲・自來水諸機器所。一橋額曰「新開橋」。中流置石為橋基三所、頗為奇巧。過之原野空濶、天宇四垂、不見一山。帆走半日、潮落小泊。散步岸上。有周太僕祠^④。雍正年間人。興水利有恩政、祠于此。涼風徐起、蘆葦顫然。始聞蛙聲。

【注】①「蔡同德藥舖」開港後の一八八二年に上海に進出した老舗の漢方薬局。漢方の四大名店の一つ。②「高平〔与一〕」未詳。③「今村〔勝

太」未詳。④「周大僕祠」道教の宮観「川沙三元宮」のこと。上海市川沙県にある。雍正六（一七二八）年創建。清代の松江知府、周中鉢を祀る。現在、上海市内唯一の坤道宮観。

訳文 六月二十一日、蔡同徳菓舗に寄り、楊齋氏を促して一緒に出発した。二宮・高平与一・島田・今村勝太の四氏が、岸边まで送ってくれた。川は呉淞江といい、俗に蘇州江ともいう。楊氏はすでに来ていた。舟は長さ三丈餘、案・卓・椅子が設けられ、ベッドが二か所に置いてあり、窓にはガラスがはめられている。「鼓浪長風」と横書きで書いてある。極めて優雅で清潔である。船頭が銅鑼を叩いて天を拝み、爆竹を燃やすと、はじけるような音が響いた。天を祭って加護を祈る意味が込められているのであろう。黄浦は大河で、大きい船が繋がれ泊まっているが、呉淞は支流であつて、船は潮の満ち引きに合わせて往來する。兩岸には市街が続き、高い建物が轟立し、電燈・ガス燈・製糸・水道などの機器所が軒を連ねている。新開橋と書かれた橋があつた。川幅の中ほど、三か所に石を積み上げて橋基としてあり、すこぶる巧みである。そこを過ぎると、原野が広々としていて、大空が四方に垂れ、一つの山も見えない。帆走すること半日、潮が引いたので、しばらく舟を泊めた。岸上を歩いてみたところ、周太僕の祠というものがあつた。周太僕は雍正年間の人で、水利を興して徳政を施したため、ここに祀つたという。涼風がおもむろに起こり、蘆が震えている。ようやく蛙の声が聞こえてきた。

原文 廿二日〔廿九日〕晨起、泊在璜渡鎮。地宜綿与藍。藍摘葉五次、至寒露而止。有一異鳥、似鷹而小、啼類人語。土人以此鳥多鳴、為綿稔之兆。転出大江、曰四江口。支流西疏、曰白鶴江。石橋額曰曹勝橋。官船妝砲、税往來賣船、曰抽釐局。一舍標「巡電房」三字、曰「官新設電線、置兵巡邏」。舟子曰、「近有繫牛線柱者、為邏兵所檢、賄百金得免」。順風張帆、駛走極快。已而雷起、驟雨傾盆、鎖船窓、暗如夜間。泊陸家浜。臥聞雨声、客懷悽然^①。

【注】①「客懷悽然」この辺り、高適「除夜作」の「旅館寒燈独不眠、客心何事轉淒然」が下敷きになった表現か。

訳文 二十二日、朝出発し、瓊渡鎮に舟を泊めた。そこは綿と藍の産地である。藍は寒露まで、五回にわたって葉を摘むという。変わった鳥がいた。鷹に似ているが、もつと小さく、鳴き声が人語に似ている。現地の人はこの鳥が多く鳴くのを綿がよく実る吉兆としている。転じて大河に出た。そこを四江口という。西に通じる支流を白鶴江という。曹騰橋と記した石橋がある。砲を装着した官船が、往來する商船から税を徴収する。抽釐局という。「巡電房」の三字が標された建物がある。「お上が新たに電線を設け、兵を置いて巡邏させている」という。水夫が言うことには、「近頃、電柱に牛を繋いだ者がいて、邏兵に取り締まられ、ひそかに百金を贈って免れた」と。順風に帆を張り、船の速度は速かった。やがて雷が鳴りだし、驟雨が盆を傾けた。船窓を鎖したため、夜のように真つ暗になった。陸家浜に泊した。横になって雨音を聞いているうち、うら悲しい旅の思いに包まれた。

原文 廿三日〔三十日〕午晴。遙望一塔聳山巔。是為崑山。得一閘橋、城壁屹然。此為崑山県。鳴鉦而進。凡舟至閘熱処、鳴鉦防他舟衝突。上岸觀県城。蔓草荒烟、满目蕭然。楊君曰、「粵匪之乱^①、兵火蕩然、無一完邑」。觀石碑立荆棘中、高二丈許、棟榱為三層、刻人物花鳥。此称名牌又坊牌。登第高科、及節孝旌表、皆得立。『五代史』^②李自倫伝、載旌表式、曰「聽事步欄、前列屏、樹烏頭正門、閘闊一丈二尺、烏頭二柱端冒以瓦桶、築双闕一丈、在烏頭之南三丈七尺」、是也。過一壁門。此為新陽県。有聖廟、四周垣墻、棟薨巍然、而榛棘滿地、閘如廢宇。里許得一市街。衙署南向、門画獐鬼、左右欄路。題「轅門」二大字。門内列朱牌、題「進士出身」「父子同科」等字、是為県庁。市人觀余異服、前後群擁、使人不勝。歸舟午餐。自此江流渺漫、

田高水面四五尺、岸設水車、男女耦立踏車、滾滾軋旋、直灌田畝。范石湖所詠「龍骨車」、是也。此車極便灌溉、而我邦所未見。抵奚亭。兩岸皆市街、石閘翼然、東西相對。過之決然為湖水。此間村落、溝渠縱橫、運搬耕具飯餉、皆用小艇、穿溝與開路一般。得一市、曰「婁門」。遙見女牆綿亘雲表。此為蘇州城。相伝伍子胥^⑤所城。周回四十二里、城門水門各八、「吳都賦」^⑥「通門二八」、是也。就壁而南。萬舸輻輳、中流僅餘通舟餘地。仰見石橋穹隆。直接城門、是為閭門。閭熱特甚。

【注】①「粵匪之乱」太平天国の乱のこと。粵匪は両広地域で蜂起した洪秀全らに対する蔑称。②『五代史』五代、すなわち後梁・後唐・後晋・後漢・後周の歴史を記した正史。③「聴事」。「烏頭」は正門の所に築かれたこの構築物全体の名称と考えられる。④「范石湖」宋の范成大（一一二六―一一九三）。号は石湖居士。⑤「伍子胥」春秋時代末の策士。本名は員、子胥は字。⑥「吳都賦」西晋の左思の作。魏・吳・蜀三国の首都の繁華の様を描いた「三都賦」のうちの一つ。

訳文 二十三日、昼ごろ晴れた。はるか向こう、一つの塔が山頂に聳えている。その山を崑山という。ある水門橋に差し掛かると、高くそびえたつ城壁があった。そこを崑山県という。銅鑼を鳴らしながら進んだ。凡そ舟は混み合うところに至ると、銅鑼を鳴らして、他の舟から衝突されぬようにする。岸上がり、県城を見て回った。つる草がはびこり人煙は立ち上つておらず、満目蕭然としていた。楊氏が言うことには、「粵匪の乱で、兵火に破壊されてしまい、損なわれていない村は一つもない」と。石碑が荆棘の中に立っているのをよく見てみると、高さ二丈ほど、棟木と椽が三層になり、人物花鳥が刻まれている。これを名牌または坊牌という。最高位での科挙及第や節孝の表彰、いずれの場合もこの牌を立てることができる。『五代史』の李自倫伝に「役所の歩廊の前に塀を列ね、烏頭を正門に立て、功業を記した柱と柱の間隔は一丈二尺とし、烏頭の二柱の先端には筒瓦をかぶせ、門は一丈の高さで築き、その位置は烏頭の南三丈七尺とする」という旌表式が載っているのが、それである。一壁門を過ぎた。そこからは新陽県である。聖廟があった。四周は垣で、棟瓦^{むながわら}が高く、イバラが地面いっぱい生い茂つ

ていて、廢屋のように静かである。一里ほどで一市街があつた。衙署は南に向き、門には凶悪な鬼が描かれていて、左右に道を遮っており、「轅門」の二大字が標されていた。門内には朱牌が並び、「進士出身」「父子同科」等の字が標されていた。これが県庁である。私の異服を見た住人たちに前後から取り巻かれるので、耐えられなかつた。舟に戻つて昼食。そこからは川の流れが限りなく広がつていて、田畑が水面より四五尺高く、岸に水車が設けられていて、男女が並び立つて踏む水車がくるくる回り、田畑に注いでいた。范石湖が詠んだ「龍骨車」は、このことであらう。このような車は極めて灌漑に便利そうだが、我が国では見たことがない。

奚亭に着いた。兩岸はずつと市街で、石の水門が鳥の両翼のように広がり、東西に相對していた。そこを過ぎると、湖水が広がつていた。この辺りの村落には、溝渠が縦横にめぐらされ、耕具や食事の運搬には、小舟を使つてゐる。道を開くのと同時に、溝が掘られている。一つの市に着いた。「婁門」とある。姫垣が雲の上まで続いているように見える。蘇州城である。伍子胥が築いたと伝えられている。周圀四十二里で、城門と水門が各々八つある。「吳都賦」の「門を通ずること二八」とは、これを言う。壁沿いに南へ進んだ。たくさん舟が輻輳し、川幅の中ほどはわずかに舟を通す餘地しかない。見上げると、弓なりに曲がつた石橋がそのまま城門に繋がつてゐる。それが閘門。相当ににぎやかなところである。

原文 廿四日（閏五月一日）移泊胥門。此為城東門。子胥抉目懸東門、是也。与楊君上岸觀閘門。樓櫓魏（巍）表、市廓宏麗、萬貨琳瑯、爛然眩目。唯街衢太隘。丐徒尾客、穢臭衝鼻。大為可厭。過一店、午飯。

雇轎訪李梅生（鴻裔）^①。凡訪人、坐轎為礼。門者捧名刺、揖入堂上。梅生出接。余出黎純齋（庶昌）^②書、筆陳來故。延別室暢話。問草游記否、且曰、「游記不易草。竹添井井著『棧雲峽雨記』^③、中人呼為東洋鬼」^④。余曰、「僕幸免此目。但僕非有衛玠之美、市人擁觀、殆為渠所看殺」。梅生大笑。梅生年貌六七十、曾任監司、為当代名流。告老治庭園、名曰蓮園^⑤。泉石布置、幽

邃之致、瀟洒之趣、余行天下所未目。

訪俞蔭甫先生〔榿〕^⑧。先生長考摛富字殖、文章著述、為一世之泰斗、嘗撰『東瀛詩選』。故於我邦撰著、無所不涉。問日東大家、楊君峯狩屋腋齋為第一、曰「森養竹伝其学、為方今名家」。夫学豈考摛之謂乎。若曰考摛腋齋為第一、可也。至峯養竹、阿所好、亦甚矣。蘇州繁華大都、而粵匪乱後鬧熱市場、鞠為茂草、壞牆廢礎、滿目蕭然、其復旧觀、十中三四耳。

【注】①「子胥抉目懸東門」譏言を受けた伍子胥は自害する前に、「吾が眼を抉り、呉の東門の上に懸けよ。以て越の寇の入りて呉を滅ぼすを觀ん」と言った。『史記』伍子胥列伝。②「李梅生（鴻裔）」李鴻裔（一八三二～一八八五）、字は眉生。「眉」と「梅」とは、現代中国語では同音。官は江蘇按察使まで至り、官を辞めてから蘇州に移り住んだ。書道に造詣が深く、詩と古文を得意とした。このとき五十三歳。③「黎蕤齋（庶昌）」黎庶昌（一八三七～一八九七）。蕤齋はその字。一八八一年から駐日公使を務めた。④「竹添井井著『棧雲峽雨記』」竹添井井（一八四二～一九一七）は一八七五年、修史局御用掛となり、森有礼に随行して渡清、翌一八七六年再び清国を旅行して、『棧雲峽雨日記』を著した。『棧雲峽雨日記』は一八七六年五月、北京を出発して蜀に入り、さらに長江を下って、八月上海に至るまでの紀行文。⑤「東洋鬼」中国語における日本人に対する蔑称。⑥「衛玠」晋の人。美男子で、都に出た時、多くの人から見られたため、勞疾に罹って死んだという（『晋書』本伝）。⑦「遯園」網師園のこと。乾隆末年に豪商瞿遠村に買い取られて改築され、「瞿園」または「遯園」と呼ばれるようになった。「瞿」と「遯」とは、中国音が同じ。同治年間の初めに李鴻裔のものとなった。⑧「俞蔭甫先生〔榿〕」俞樾（一八二一～一九〇六）、徳清（浙江省）の人。蔭甫はその字、晚年曲園居士と号した。清朝考証学の大家。翰林院編修や河南学政を歴任、一八六二年以降、蘇州や上海で学問を講じた。一八六八年から杭州に詒経精舎を開設した。⑨「狩屋腋齋」一七七五～一八三五。江戸時代の考証学者。⑩「森養竹」森立之（一八〇七～一八八五）、養竹は通称。江戸後期から明治にかけての医師にして、書誌学者。

訳文 二十四日、移って胥門に舟を泊めた。この門を城東門という。子胥が目を抉って東門に懸けたのは、ここである。楊氏と岸に上がって閭門一带を見て回った。榿が高大で、店も大きく立派で、美しい玉のような沢山の商品が目まぶしい。ただ

通りはひどく狭い。乞食がついてきて、不潔なおいが鼻を衝き、いとわしい限りである。一軒の店に入り、昼食。

轎を雇って李梅生（鴻齋）氏を訪ねた。凡そ人を訪ねるには、轎に乗るのを礼とする。門番が名刺を捧げ持ち、揖して堂上に入った。梅生氏が迎えに出て来てくれた。私は黎純齋（庶昌）氏の書簡を出し、筆で来意を述べた。別室に案内されて歓談した。梅生氏は、遊記を書いているかと問い、かつこう言った。「遊記を書くのは大変だ。竹添井井が『棧雲峽雨記』を著したが、中国人は彼のことを東洋鬼と呼んでいるしね」。私はこう返した。「私はそのような目には遭っていない。ただ、私には衛玠のような美貌などないのに、住人たちが取り巻いて、じろじろ見るので、ほとんど殺されかけている始末だ」。梅生氏は笑った。氏は年のころ六、七十くらい、かつて監司に任じ、当代の名流である。老いて辞任して庭園を治めており、庭園の名を蓮園という。泉石の布置、幽邃な有様、瀟洒な趣は、私がこれまで天下を巡ってまだ見たことのないものであった。

兪蔭甫先生（樾）を訪ねた。先生は考証学に長じ、学殖に富み、文章著述において、一世の泰斗であられ、かつて『東瀛詩選』を撰せられたので、我が国の撰著について、通じないものはない。先生が日東の大家をお尋ねになったところ、楊氏は狩屋腋齋を第一として挙げ、「森養竹がその学を伝え、方今の名家となっている」と説明したが、考証学だけが学問であろうか。考証学なら腋齋が第一だと言うのは、いいとしても、養竹を挙げるに至っては、自分の好みにおもねり過ぎである。蘇州は繁華な大都会であるが、粵匪の乱後、賑わっていた市場も、ことごとく草茫茫となり、崩れた垣に荒れ果てた礎、見渡す限り物寂しい光景だった。旧観を復しているのは、三、四割に過ぎぬという。

原文 廿五日（三日）擬買舟一游虎邱、以雨止。惺悟（吾）雜陳在東所獲古写経、把玩不置、曰「此猶晋時筆法。宋元以下、無此真致」。我邦南都諸寺、及安藝嚴島社、我郷中尊寺古写経、皆紺地金泥、筆画端正。惜不使惺悟（吾）一見。陳松泉（春昌）^③來過。楊君旧知、在此知書局。

午後從楊齋、過蔡氏菓舖。宏厦深沉、此間猗頓^⑤。中土街路局束（促）、僅通轎子。蓋由稠密萬戶、限以城壁、不似我邦市井在城壁之外也。粵匪之乱、委為荆棘、改設城市之制、此時為然。夜聞人家擊鑼吹笙。婦女号泣。問之哭死也。

【注】①「虎邱」蘇州市の小山。春秋時代の末期、吳王夫差が父親を葬った所。②「紺地金泥」紺色に染めた紙に金泥を用いて書いた経巻や仏画などを言う。③「陳松泉（壽昌）」陳壽昌。松泉はその号か。④「猗頓」春秋時代の富豪。河東で製塩業に従事し、巨万の富を得たという。

訳文 二十五日、舟を雇つて虎邱へ行こうかと思つたが、雨のため中止。惺吾氏が、日本で手に入れた古写経を並べ、手に取つて矯めつ眇めつし、こう言つた。「これは晋の筆法を残している。宋元以後は、このような本物の趣がない」。我が国の南都の諸寺や、安藝の嚴島社、我が古里にある中尊寺の古写経は、いずれも紺地に金泥で、筆画が端正である。惺吾氏に見せてやれなかつたのが残念である。陳松泉（壽昌）氏が来た。楊氏の旧知で、この蘇州で書局を経営している。

午後、楊齋に付いて、蔡氏の菓舖へ行つた。奥行きのある大きな店構えで、この地の猗頓である。中国は街路が狭く、やつと轎が通れる程度である。思うに、市井が城壁の外にある我が国と異なり、たくさんの稠密な家々を、城壁で限つてゐるためである。粵匪の乱で荒廢して後、改めて都市の制を設けようとしたというもの、まだ以前のままだつた。夜、人家で銅鑼を撃ち、笙を吹き、女性が号泣している声が聞こえてきた。尋ねてみると、人の死を哭しているとのことであつた。

原文 廿六日（四日）楊齋導觀盛氏留園^①。出閭門、南行二三里、得一第宅。四匝垣牆、是為留園。園四五百畝、樓臺重疊、亭榭迤邐。標深遠以太湖石^②、飾幽邃以花卉池沼、取韻致以諸名流扁額題聯。塾文瓦為逕、嵌石帖為壁、畜孔雀翳（翳）翠文禽以

雕籠。余前見李君遽園、愕然、至是嗒然自失。中土大國。奇偉壯麗、何所不在焉。觀蔭甫碑、曰「園劉氏所闢、粵匪之兵火、此園獨免。及婦盛氏、以劉留音同改稱」。飯閭門外一店。見大官之過。輿馬僣從、鳴鉦翻旆、前後簇擁、猶我幕府時列侯。屢轎与楊齋訪沈廉訪（仲復）・楊醒甫（引伝）・汪上舍（瘦吟）・秦膚雨（雲）、皆不在。

晚与楊君赴陳松泉之邀。会者為陸雲孫（懋宗）・汪少符（兆曾）・文小坡（焯）^④。楊君每談日東一事、滿坐閔然。余不解華語、癡坐其旁。因以為我俗席地而坐、食無案卓、寢無臥床、服無衣裳之別、婦人涅齒、帶広蔽腰圍等、皆為外人所訝者。而中人辮髮垂地、嗜毒烟甚食色、婦女約足、人家不設廁、街巷不容車馬、皆不免陋者。未可以内笑外、以彼非此。抑我与中土同文隣域、而猶異其風俗如此。况歐米遼遠、人異種類、宗教文字、氷炭相反者乎。而今五洲往来、互訂友誼。此真宇内一大變。

【注】①「留園」明の萬曆二十一（一五九三）年に建てられた。創建当時は「東園」と呼ばれたが、その後、「劉園」と呼ばれるようになり、さらに同治十二（一八七三）年に盛康（一八一四〜一九〇二）に購入されて以後、「留園」と呼ばれるようになった。②「太湖石」峰・溪・洞などの形をした石。太湖から出る。③「沈廉訪」沈仲復は、名は秉成。一八三三〜一八九五。仲復はその字。婦安の人。廉訪は按察使の通称。妻の嚴少監とともに詩・書・画を善くした。楊引伝は江蘇吳興の人で、字は醒通（甫）と同音。「上舍」は清代の国子監の学生のこと。秦雲（道光から宣統にかけての人）は、字は膚雨。詞曲が得意であった。④「陸雲孫」陸懋宗、字は雲孫。江蘇常熟の人。書を善くした。中華民国成立後数年、七十餘歳で卒した。汪、文の兩人は未詳。なお、「汪少符（兆曾）文小坡（焯）」の部分は「汪少符（兆）鄭小坡（文焯）」の誤りである可能性が高い。鄭文焯（一八五六〜一九一八）、小坡はその号。内閣中書を務めた後、四十餘年にわたり蘇州に隠居した。詞、金石、書画、医学を善くした。⑤「衣裳之別」本来、上半身に着けるものを「衣」といい、下半身に着けるものを「裳」という。その区別。

訳文 二十六日、楊齋氏の案内で、盛氏の留園を見た。閭門を出て、南に二、三里行つたところに、一邸宅があり、周りに垣がめぐらしてあった。留園である。園は四、五百畝の広さで、樓臺が折り重なり、亭・榭がくねくねと続いている。太湖石で

深遠さを表し、花卉・池沼で幽邃さを飾り、諸名流の扁額題聯で韻致を醸し出している。文様のある瓦を敷いて小道とし、石帖を嵌めて壁とし、雕籠に孔雀・翡翠など羽毛に文彩のある鳥を飼っている。私は一昨日、李氏の蓬園を見て愕然としたが、ここに至って茫然自失した。中国は大国である。立派で壮麗なるものは、何でもそろっているのだ。蔭甫氏の碑文には、こう書いてあった「園は劉氏の闢きし所にして、粵匪の兵火は、此の園のみ独り免れたり。盛氏に帰するに及びて、劉・留 音同じきを以て改称せり」。閩門外のある店で食事をした。高官が前を通って行つた。車や馬、従者を従え、銅鑼を鳴らし旆を翻し、前後を守られて、我が国の幕府時代の大名のようであつた。轎を雇つて、楊齋氏とともに沈廉訪〔仲復〕・楊醒甫〔引伝〕・汪上舍〔瘦吟〕・秦膚雨〔雲〕の各氏を訪ねたが、みな不在だつた。

晩に楊氏とともに、陳松泉氏の招きに応じて出かけた。そこで会したのは、陸雲孫〔懋宗〕・汪少符〔兆曾〕・文小坡〔焯〕の諸氏であつた。楊氏が日本の事を一つ一つ話すたびに、満座がどよめいた。私は華語を解さぬので、傍らにぼうつとして座つていただけである。そのとき思つたのは、次のようなことである。すなわち、我が国では床に座り、食時の際、テーブルは使わず、寝る時もベッドは使わず、服に衣裳の別なく、婦人はお齒黒をし、帯の広さは腰の周りを蔽うが、これらはいずれも外人に訝られる点である。一方、中国人は辮髪を地面まで垂らし、阿片を好み、食欲・色欲が甚だしく、女性は足を縛り、人家に廁を設けず、表通りも裏通りも車馬も通さぬほど狭く、いずれも醜さを免れぬものである。しかし、内をもつて外を笑い、彼をもつて此れを非としてはならない。そもそも我が国と中国とは同文の隣同士であるとはいえ、これほど風俗を異にしている。となれば、もつと遼遠で、人種が異なり、宗教も文字も氷炭相反するがごとく欧米は、なおさらである。にもかかわらず、今では五洲の人々が往来し、互いに友誼を結んでいる。これは真に宇内の一大変化である。

原文 廿七日〔五日〕膚雨來談、贈其著二種。赴梅生之招、延至奧室。廻廊迤邐、庭院深沈、文房器具、古香可掬。出示寶軸數種。皆人間有數者。已而酒出。鳳炙鶴羹、極海山之珍。中土富貴家、自奉矜貴。實為可驚。

帰途過顧良庵〔文彬〕^①。門陳肅清道臺翰林布政等朱牌、皆在官時所用。導觀其所闢怡園。曲房垂阿、間以奇卉異草、澄池虛潭、交以古木怪石。石大者二三丈、巖竇四鑿、突怒偃蹇、無斧削之痕。彩籠銅孔雀丹鶴金鷄諸異禽。未知洛陽名園、有此壯麗否。^③乾隆帝南幸三次、常曰、「身為天子、不及蘇杭十萬富翁快樂自由」。余歷觀留園・蘧園・怡園三名園、始徵是言。

〔注〕①「顧良庵〔文彬〕」顧文彬（一八一〜一八八九）、字は蔚如。良庵はその号か。諸官を歴任した後、晩年蘇州に帰り、十五年家居して卒した。②「突怒偃蹇」柳宗元の「鉛鋸潭西小邱記」に見える語句。③「洛陽・壯麗否」宋の李格非の「洛陽名園記」を意識した表現。

訳文 二十七日、膚雨氏來談、その著二種をくれた。梅生氏の招きに応じて出かけた。奥の部屋に案内された。回廊が曲がりくねり、庭は奥深く、文房具からは、古めかしい香りが手に掬い取れるほど溢れていた。宝軸数種を出して見せてくれた。いずれもこの世に有数のものであった。やがて酒が出た。まさに鳳の焼き物に鶴の羹といったところ、山海の珍味を極めていた。中国の富貴な家は、自分の財布をほたいて自分を高貴に見せようとする。本当に驚くべきである。

帰途、顧良庵〔文彬〕氏を訪れた。門に「肅清道臺」「翰林布政」等の朱牌が陳列されていた。いずれも在官時に用いていたものだという。自ら開いた怡園を案内してくれた。奥まった部屋や東屋は、珍しい草花で隔てられ、水の澄んだ池やその岸の周りには、古い樹木や変わった形の石が交じっている。石の大きなものは二、三丈あり、穴があちこちに空き、勢い激しく突っ立ち高く連なっており、小細工を加えた痕はない。彩色の施された籠には孔雀・丹鶴・金鷄等の珍しい鳥が飼われている。洛陽の名園にも、これほどの壮麗さがあったかどうか。乾隆帝は南幸すること三度、常に「身は天子たるも、蘇・杭の十萬富翁の快樂と自由自在なのに及ばない」と言ったそうだが、私も留園・蘧園・怡園の三名園を見て、はじめて実感をもって納得した。

原文 廿八日〔六日〕与楊君觀滄浪亭。与紫陽書院相對、門扁曰五百名賢祠。有僧寺曰大雲庵、池水湛然、環大湖石作假山、穿洞而上下。大厦二字、所揭聯額、皆名人筆蹟。其右有名賢祠、刻季札^①、伍員以下五百人肖像、各附四言贊。有三層樓、臨觀府城。蘇舜欽^②遷謫築是亭、後人相伝至今日。餘風入人者深矣。

赴畢保釐^③之饗。子嘉澍出接。坐客数名、皆文士。問此間勝地、曰「范文正墓^④、距此半日程、今猶有義田宅^⑤。寒山寺在城西、乱後荒涼、無足觀」。帰途過良庵。出示東坡謝表^⑥・松雪臨王帖^⑦・宋画・羅漢像・宋人写經・宋刻「九成宮銘」^⑧。末附元明大家跋語。良庵刻之園壁、曰怡園法書。贈一本。良庵七十三、容貌如五六十歲人、官歴貴顯、今老林下。為惺悟「吾」旧知。

【注】①「季札」春秋時代、呉の寿夢王の第四子。②「蘇舜欽」北宋の人。中央の権力闘争の犠牲になつて官位を剝奪され、蘇州に隠遁し、四萬錢で滄浪亭（もと五代中呉軍の節度使孫承石の池館。その後、荒れ果てた）を買つて、そこで餘生を過ごした。③「畢保釐」一八二九？。湖北蘄水の人。編修、江蘇蘇州府知府を務めた。潘存原輯、楊守敬編『楷法溯源』（一八七八年）に序を書いている。④「范文正」范仲淹（九八九～一〇五二）。宋の名臣。蘇州呉県の人。字は希文。文正は諡。⑤「義田宅」公共のための田地や住宅。范仲淹は晩年、一生の蓄えを子孫に残さず、郷里の蘇州に広く義田や義宅を設け、困窮した人々を救つたという。⑥「謝表」臣下が君主の恩遇に対する感謝を述べる上書。⑦「松雪臨王帖」松雪道人は、詩人で書画にも巧みであつた元の趙孟頫の号。⑧「九成宮銘」九成宮醴泉銘。九成宮で唐の貞観六年に醴泉（甘い泉）が湧き出したのを記念し、太宗の徳をたたえるため建てられた碑に刻された銘。古来、楷書を学ぶ時の最高の模範。

訳文 二十八日、楊氏と滄浪亭を見て回つた。紫陽書院と向かい合つていて、門に「五百名賢祠」という扁額が懸かつている。大雲庵という寺があり、池の水がいっぱい満ち、太湖石をめぐるして築山としてあり、穴を通つて上り下りする。大きな建

物が二つ、掲げてある聯額は、みな著名な人物の筆蹟である。その右に「名賢祠」というものがあり、季札・伍員以下五百人の肖像が刻まれ、各々四言の贊が附してある。三層の樓があり、府城を見下ろしている。蘇舜欽が遷謫されてこの亭を築いたと、後人が相伝えて今日に至っている。餘風が深く人に染み込んでいるわけである。

畢保釐氏に食事に誘われていたので、出かけた。子の嘉澍氏が出迎えてくれた。座っている客は数名、みな文士である。この地の勝地を問うと、「范文正の墓が、ここから半日ほどの道のりで、今も義田宅がある。寒山寺は城西にあり、乱後荒涼として、見るに足るものはない」とのことだった。帰途、良庵氏を訪ねた。良庵氏は東坡の謝表、松雪の臨王帖、宋画、羅漢像、宋人の写経、宋刻の「九成宮銘」を出して見せてくれた。末尾に元明の大家の跋語が附してあった。良庵氏はそれらを圍壁に刻しており、怡園法書という。一本をくれた。良庵氏は七十三というが、容貌は五、六十歳の人のように見えた。官は貴顕を経て、今は隱居して老後の生活を送っている。惺吾氏の旧知である。

原文・廿九日〔七日〕膚雨与其友潘麟生〔鍾瑞〕^①來訪。麟生贈『庚申噩夢記』。紀粵匪陷蘇時、率家屬遁亂。一読慘鼻。粵匪陷十六省・三百州・六百城、乱亘十五年、保金陵十二年、殺害無辜以百萬數。曾文正募義勇大舉、遣其弟國荃^②復金陵。李中堂自上海、長驅復蘇州、左元帥入杭州、復兩浙〔浙〕福建二省。中土有今日、實由此二三公之力云。

蔭甫先生來報^③。余一窮措大。而先生名位德望、冠絕一世。而先生不敢鄙棄、枉問答禮。此亦可吐氣矣。言及為學之方。先生曰、「文章一道、固無中東之分。然而論文講學、須先認清門徑。不用意于此、則工夫亦又誤了。曩選貴國詩。雖未足以尺貴國之長、頗足以除貴國之短。從此問軌途、必無大疵病。經學須上法漢唐、至詩文、則不必拘泥。然而多讀古書、則抒叙性靈、摹寫景物、氣味自別」。皆閱歷這裏甘苦之語。

晚間散步閩外。橋側見丐徒僵死、及刑人頸穿方板二三尺許、踞路左、乞錢食菓、恬無羞色。

【注】①「潘麟生〔鍾瑞〕」潘鍾瑞（一八二三—一八九〇）、字は馨（麟）生。『海上墨林』卷三によれば、「吳県人。諸生。作隋魏書、精雅靡匹。長於金石考証。」②「曾文正」曾國藩（一八一—一八七二）。文正はその諡。③「其弟國荃」曾國荃（一八二四—一八九〇）。清末の官吏、軍人。④「左元帥」左宗棠（一八二二—一八八五）。清末の政治家、軍人。⑤「來報」「來訪」の誤りか

訳文 二十九日、甯雨氏がその友、潘麟生〔鍾瑞〕氏と來訪。麟生氏から『庚申噩夢記』の贈呈にあずかった。粵匪が蘇州を陥れた時、家族を連れて乱を逃れたことを記したもので、一読して酸鼻である。粵匪は十六省、三百州、六百城を陥れ、乱は十五年にわたり、金陵を十二年間保ち、何百萬もの無辜の民を殺害した。曾文正が義勇軍を募って大挙し、弟の國荃を派遣して金陵を回復させた。また、李中堂が上海から長駆して蘇州を回復し、左元帥が杭州に入り、両浙・福建の二省を回復した。中国に今日があるのは、実にこの二三公の力によるといふ。

蔭甫先生が來訪。私は貧しい書生であるのに対し、先生は名声・官位も徳望も、一世に冠絶しておられる。にもかかわらず、先生は私を鄙棄されず、枉げて訪問し答礼してくださった。氣を吐くことができたと言える。学をなす方法についての話になった。先生曰く、「文章の道には、もともと中・日の区別はない。とはいえ、文を論じ学を講ずるには、まず手がかりをはつきりと見定めるべきである。この点に意を用いなければ、せつかくの努力も誤った方向へ進んでしまう。以前、貴国の詩を選んだことがある。貴国の長を尽くすところまでは行かなかつたにせよ、貴国の短を除くには十分であった。これを基準にして道筋を問えば、必ず大きな疵はないであろう。経学は漢唐にのつとるべきだが、詩文は必ずしも何かに拘泥するには及ばない。とはいふものの、多く古籍を読めば、心を述べ表すにも、景物を模写するにも、氣味がおのずから際立つてくる」。いずれも学をなす際の甘苦を嘗めてきたところから出た言葉であつた。

晩に閩門の外を散歩した。橋の傍らに、行き倒れになつた乞食の死体があつた。また、首に二三尺ほどの四角い板をはめら

れた受刑者がいた。道端にうずくまり、物乞いをして得た金で物を食い、恬として羞じる様子がなかった。

原文 三十日〔八日〕朝雨。訪蔭甫先生辞別、且請反棹日、受教門下。先生憂法事、問何所帰着。余曰、「小人好談当世。所呈法米二誌、『尊攘紀事』^①、是也。後悟此事有命、且天下之事、非一書生所能了、断然絶念于此、以温旧業、為事」。先生忻然曰、「書史為遺老之具、極是人生樂事」。

与楊齋及濯、往觀獅子林。^② 為倪雲林旧蹟。園壘積大湖石、妝点景致。鑿為窟室、竦為峰巒。屈曲通逕、可以登降。石大者二三丈、如蝦蟇、如鷹隼、如僊仏、如夜叉、虎踞猊蹲、極布置之妙。門扁曰真趣、碑亭刻康熙帝留題詩。而粵匪乱後、亭榭樓閣、破壞不理、名流勝蹟、漸歸荒涼、為可深惜。

婦途觀凹妙觀。^③ 架樓三層、隆起聳天、仏像大二丈許、錢塘大商胡雪巖所再建。茶肆酒亭、左右環列、吞劍・攀竿・舞猴諸雜戲、無一不有。士女鬻集、極為鬧熱。雨起、疾步而還。街路墊石、石面鋸紋、防滑沢。或密填瓦磚、為凸状。故雖雨不病泥濘。唯病路太狹爾。

楊君以官有程期、期明晨發此反棹。燈下話別、曰「余漂泊四方、而交遍貴紳。子不求当世、而名流賓待。兩人身世、何爾相似。此行、連月共寢食、忘形爾汝、使人杳然為对虚〔虚〕舟之念。子終是游、溯長江過余黃州寓。盤桓一月、共話平生心事。而後一帆度海。余日夜懸榻以待」。又為余作書、紹介輩下名人。夜半移乘他船。離緒凄然。

【注】①「法米二誌・『尊攘紀事』」法米二誌は『法蘭西志』と『米利堅志』。前者はフランス史。一八七八年に刻成り、露月樓から上梓。標題には「猶里氏原撰法蘭西志」とあり、下に高橋二郎訳述、岡千仞刪定」と記されている。「猶里」はジュリー。高橋の記すところによれば、フランスのジュリーの『法国史要』（一八六六年）・『近代史略』（一八六九年）・『法国史』（一八〇七年）の三書を取り、その要領を訳し

て一編とし、鹿門が刪定を加えた。後者は格堅扶（カッケンブス）が原著者。一八七一年頃、河野釜汀（通之）と共訳。一八七三年に光啓社から上梓。『尊攘紀事』は、ペリー来航から大政奉還までを叙述した幕末・維新史。一八八二年刊。②「獅子林」蘇州の拙政園のすぐ南にある庭園。蘇州四大庭園の一つ。③「倪雲林」倪瓚。元末四大画家の一人。雲林子がその号。④「碑亭」石碑を覆う亭。⑤「円妙観」道教寺院。晋代に真慶道院として創建され、その後、元代に玄妙観となり、清代に聖祖の諱を避けて円妙観と改称された。⑥「胡雪巖」胡光墉（一八二三―一八八五）。雪巖はその字。清末の実業家。

訳文 三十日、朝雨。蔭甫先生を訪ねて辞別し、「蘇州に帰ったら、門下に入り、教えを受けたい」とお願いした。先生はフランスとの事を心配され、どのように結着するだろうかと尋ねられた。私はこう申し上げた。「私は当世について語るのが好きだった。献呈した法米二誌と『尊攘紀事』は、その所産である。しかし、その後、こうした事には命めいがあり、かつ天下の事は、一書生の手には負えるものではないと悟り、断然そこには念を絶ち、以前の事業を温めることを事としている」。先生は忻然として、おっしゃった。「史を書くのは老後を過こす慰めとなり、人生の楽しみとしてこの上ない」。

楊斎氏及び濯と、獅子林を見に行った。獅子林は倪雲林の旧蹟である。園は太湖石を積み重ねて、景色に彩りを添えている。穿たれた地下室もあれば、聳える峰々もある。小道が屈曲して通じており、登降することができる。石の大きなものは二、三丈あり、蝦蟇のように見えるもの、鷹や隼のように見えるもの、仙人や仏のように見えるもの、夜叉のように見えるものが、虎や唐獅子のようにうづくまっております。布置の妙を極めている。門の扁額には「真趣」とあり、碑亭には康熙帝が留め題した詩が刻まれている。しかし、粵匪の乱後、亭榭楼閣は破壊されたまま、修理されていない。名流の遺跡がしだいに荒廢に帰していくのは、深く惜しむべきことである。

帰途、円妙観を見た。三層の楼で、隆起して天に聳えており、仏像は二丈ほどの大きさである。銭塘の大商人、胡雪巖の再建に係る。茶店や酒屋が左右に並び、呑劍・竿のほり・猿回し等、いろいろな雑戯をやっていた。男も女も群がり集まり、極

めてにぎやかである。雨が降りだしたので、速足で帰った。街路には石が敷かれており、石の表面の鋸紋のこぎりもんの凹凸が滑沢を防いでくれる。密に瓦と煉瓦が埋められて凸状になっている所もある。そのため、雨が降っても、泥濘に悩まされることがない。ただ、道があまりにも狭いのは困ったものである。

楊氏は、官に任期があるため、明朝、船でここを発して黄州に帰ることになっており、燈下に別れを語り、次のように言ってくれた。「私は四方に漂泊し、多くの貴顕や紳士と交際した。一方、あなたは世に用いられることを求めているが、名士に賓客として待遇してもらっている。兩人の身の上は、何とよく似ていることか。この旅は、連月、寢食を共にし、形を忘れ、君・僕と呼び合うような仲になり、虚心坦懐の念を抱くようになった。今回の旅を終えたら、長江を溯り、私の黄州の寓居に来て、一月逗留されよ。平生の思いを語り合おう。その後、海を渡って帰国したらよろしい。日夜榻を懸けて待っている」。そして、北京の名士への紹介状を書いてくれ、夜半、移って私とは別の船に乗った。別離の寂しさがこみ上げてきた。

原文 七月一日〔九日〕朝陰。辰牌①解纜。回觀城壁掩映水烟模糊之中。頗為佳觀。過吳門・覓渡二橋。群峯蜿蜒、天末拖翠。為吳中諸山。觀軍營。列樓櫓、戎士數百、出門外練兵。前為槍隊、後銃隊。旌旗翻翻、旗卒居兵卒半、猶我甲越軍制。自是江流瀾漫、石橋截水心、亘二三里。扁曰宝帶橋。此間橋梁、甃石成門、以通行舟。我邦所謂鬩鬩橋者②。而宝帶橋穿門五十餘、為最鉅工。遙望七層塔。為吳江景。

暮泊松陵鎮。上岸觀一叢祠。神像供具、無異我邦。唯聯額爛然為異耳。隣舟有貴官、吹毒烟、妖臭紛然、終夜不絕。

【注】①「辰牌」午前七時から九時までの二時間。②「鬩鬩橋」眼鏡橋。アーチ橋。

訳文 七月一日、朝曇っていた。辰の刻に纜を解いた。見渡せば、模糊とした霧の中に城壁が掩映している。素晴らしい眺め

である。呉門・覓渡の二橋を過ぎた。峰々が蜿蜒と連なり、空の果てに翠の線が引かれているように見える。呉の山々である。軍営には物見やぐらが連なり、数百人の兵士が門外に出て練兵をしている。前が槍隊、後ろが銃隊で、旌旗が翻っている。旗士が兵卒の半ばを占めるのは、我が甲越の軍制と同じである。この辺りから川の流れが広くなり、二、三里にわたって石橋が架かっている。宝帯橋と標された橋があつた。この地の橋梁は、門の形に石を積み重ね、行き交う舟を通してゐる。我が国の所謂鬮橋である。宝帯橋は門が五十餘穿たれていて、最も大きい。遙か向こうに七層の塔が見える。そこからは呉江県である。

日が暮れて、松陵鎮に泊した。岸の上つて、林の中にある祠を見た。神像が祀られていて、その点では我が国と異なるところがないが、ただ、対聯の書かれた額がまばゆく華やかなのは異なつていた。隣の舟に貴官がいて、阿片の煙を吐いていた。妖しい臭いが紛然として、終夜絶えなかつた。

原文 二日〔十日〕平明舟人喧嘩、曰「揚帆発舟」。起掲蓬（篷）戸。曉烟始斂、四望寥廓、見旭日出蘆葦之間。唐詩「欸乃一声山水緑」者。正午抵平望。石橋隆起三四丈、上橋聘（聘）望。市人麇集、皆呼東洋人。自是湖沼淼漫。一橋曰長虹、一聚落為王江涇。此為江浙二省分界。往往見牌榜^②巍立蔓草之中。惕齋曰「王江涇本為此間名邑。余少時從洋人來此、買綿絲。粵匪亂後、流亡畧尽。自此至嘉善、兵禍尤慘、良田沃土、尽皆汚萊。官新移四方浮戶、從事開墾」云。

日晡泊嘉興、觀杉青園^④。有帆影・落帆二亭、為宋代勝蹟。名人題詠、壁無餘地。堂安李白像、曰「園主酒戶。故祀青蓮」^⑤。問陸贄^⑥・曹彬祠、曰「陸祠亂後未復、曹祠在南門外、己〔己〕復旧觀」。与惕齋酌一店。月色如昼。

【注】①「欸乃一声山水緑」柳宗元「漁翁」の第四句。②「牌榜」掛札、看板のこと。しかし、それでは「巍立蔓草之中」という描写と合わ

ないから、「牌坊」の誤りではないかと疑われる。「牌坊」は本稿六月廿三日の条に見える「坊牌」と同じ。③「浮戸」土着でなく、籍の定まっていない者。④「杉青園」『読史方輿紀要』卷九十一「嘉興府」秀水県の条に載る「杉青堰」のことと考えられる。⑤「青蓮」青蓮居士は李白の号。⑥「陸贄」唐、蘇州嘉興の人。その奏議を録した陸宣公奏議は政書として有名。⑦「曹彬」(靈寿(河北)の人。後周・北宋の軍人、北宋建国の元勳の一人。

訳文 二日、明け方、水夫が「帆を揚げ、舟を出さず」と大きな声を挙げた。起きて苦を上げてみると、朝靄も治まったところで、見渡す限り広々としており、朝日が蘆の間から昇ってくるのが見える。唐詩の「欸乃一声 山水緑なり」といったところである。正午に平望に着いた。石橋の隆起は三、四丈である。橋に上って眺めてみた。群がり集まった住民たちがみな、「東洋人」と叫んだ。そこからは湖沼が広がっていた。長虹という名の橋があり、王江涇と呼ばれる集落があった。ここが江・浙二省の分界である。往往、つる草の中に牌榜の聳え立っているのを見かけた。楊齋氏が言うことには、「王江涇はもともと、この辺りの名邑だった。私は若い時、西洋人に従って、綿糸を買いに来たことがある。しかし、粵匪の乱後廢れて、ほぼだめになってしまった。ここから嘉善までの一帯は、戦禍がきわめて甚だしく、良田も沃土もみな荒れ果ててしまった。お上が近年、四方の浮戸を移住させ、開墾に従事させている」云々。

日が暮れて、嘉興に泊した。杉青園を見た。帆影・落帆の二亭があり、宋代の旧蹟である。著名な人物の題詠で、壁には餘す所がない。堂には李白の像が置かれている。「園主が上戸であるため、青蓮を祀っているのだ」ということだった。陸贄と曹彬の祠について問うたところ、「陸祠は乱後まだ修復されていない。曹祠は南門外にあり、すでに旧觀を復している」とのことだった。楊齋氏と、ある店で酒を酌んだ。昼間を思わせるような月色だった。

原文 三日(十一日)見三大塔。日龍王廟。旁一祠、壁書「報国尽忠」四大字。知其為武穆祠^①。一橋題曰「東坡三過題詩処」。

坡集有「三過本覺寺文長老」詩^②、是也。問本覺寺曰、「廢已〔已〕久」。一橋跨空、曰拱辰橋。有僧立橋下、唱經乞錢。此橋或僧徒募緣所建。抵石門隄。伝為勾踐築石門防吳兵處。就壁左折、泊東門下。見輪船繫二大艦、載大官駛走。江浙二省、自上海而蘇州、自蘇州西、經太湖而出長江、東經杭州而至寧波。河流四達。若浮輪船、以資商旅、通漕運、天賦形勝、一變為陸海也必矣。聞政府亦有此議、而恐失業細民、滋擾生事、不行。姑息亦甚。

【注】①「武穆」岳飛の諡。②「三過本覺寺文長老」詩「蘇軾に三度にわたり秀州（今の浙江省嘉興県）の報本禪院（本覺寺）の文長老（長老は住職の敬称）を訪れて詠んだ三首の詩——「秀州報本禪院郷僧文長老方丈」「夜至永樂文長老院。文時臥病退院」「過永樂文長老院已卒」がある。それらをまとめて、こう称したもの。

訳文 三日、三大塔を見た。龍王廟という名である。傍らの祠は、壁に「報国尽忠」という四大字が書いてあったから、武穆祠だということが分かる。「東坡三たび過りて詩を題せし処」と標された橋があった。東坡の集に「三たび本覺寺の文長老に過る」という詩があるが、それにちなむ所であろう。本覺寺について問うたところ、「廢れて久しい」ということだった。空に跨るほど隆起した橋があった。拱辰橋という。橋の下に立って、經文を唱え錢を乞うている僧がいた。橋は僧徒が淨財を募って建てたものかもしれない。石門隄に着いた。勾踐が石門を築き吳兵を防いだ、その場所と伝えられている。壁沿いに進んで左折し、東門の下に泊した。汽船が二隻の大きな船を繋ぎ、高官を載せて走っていた。江・浙二省は、上海から蘇州へ進み、蘇州から西へ向かえば、太湖を経て長江に出るし、東へ向かえば、杭州を経て寧波に至る。そのように、河流が四方に通じている。もし汽船を浮かべて、商人に資し、水運を通じたならば、天賦の形勝が一変して物産の豊富な陸地となること必定である。聞くところによれば、政府にもそのような發議があったものの、失業中の細民が騷擾して事が起こるのを恐れ、実行しなかつたという。姑息なること甚だしい。

原文 四日〔十二日〕見一石橋隆起半天、維船登橋。東南得二山。大為臨平、小為半山。自上海至此、崑山・虎邱、不過一培塿、唯此二山隆起、稍強人意。過龍光橋。題聯曰、「前程九里古棠墅、此処一名落瓜堰」。所在橋柱、皆題聯句。而此聯湊合地名、極為妙搆。

午牌至塘西。兩岸皆市街。二石閘屹立、挾市街、為郭門狀。自此以南、稱武林又虎林。以音近有此二稱。屬臨平鎮。水光如鏡、萬象倒影、菱荷叢生、鸞鷓群集、條然有真趣。宋人詩好詠臨平風景。今始知其妙尽。

暮泊一漁村。曰謝村。杭州距此猶二十里餘。

訳文 四日、空の半ばまで盛り上がるほどの石橋を見かけたので、船をつなぎ止め、登ってみると、東南の方に二つの山が見えた。大きいのが臨平で、小さいのが半山である。上海からここまでの間、崑山や虎邱は小高い丘という程度に過ぎない。この二山だけは隆起しているので、なんとか納得できたような気がした。龍光橋を過ぎた。題聯に「前程九里 古の棠墅。此処は一名 落瓜堰」とあった。どの橋柱にも對聯の句が書きつけられているが、この對聯は地名を一つに合わせていて、極めて巧みである。

正午ごろ、塘西に着いた。兩岸にはずっと市街が広がっている。二つの石の水門が屹立して市街を挟み、町の門のようになっている。ここより南は、武林または虎林と称する。音が近いから、二称があるのである。臨平鎮に属す。水の光が鏡のように、萬象がその影をさかさまに映し、菱や蓮が叢生し、鸞や鶉が群集し、本物の趣がある。宋人の詩に好んで臨平の風景が詠まれているが、今初めて詩にその妙趣が尽くされていることが分かった。

日が暮れて、謝村という一漁村に泊した。杭州はここからまだ二十里餘の距離である。

参考文献

- 単行本 三箇功『阿片の話』（南満洲鉄道庶務部調査課、一九二四年）。対支功勞者伝記編纂会編輯兼発行『対支回顧録』下巻（一九三六年）。魏原著、興亜院政務部訳『聖武記』（生活社、一九四三年）。明治文学全集4『成島柳北 服部撫松 栗本鋤雲集』（筑摩書房、一九六九年）。『明治過去帳〈物故人名辞典〉』（東京美術、一九七一年）。石山福治編著『中国語大辞典』（国書刊行会、一九七四年）。小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集』第二冊（筑摩書房、一九八四年）。小川環樹・山本和義『蘇東坡詩集』第三冊（筑摩書房、一九八六年）。下中彌三郎編『縮刷東洋歴史大辞典』（臨川書店、一九八六年）。中国国家文物事業管理局編、鈴木博訳『中国名勝旧跡事典』（ぺりかん社、一九八六年）。京大東洋史辞典編纂会編『東洋史辞典』（東京創元社、一九九〇年）。朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』（朝日新聞社、一九九四年）。張治国監修『最新中国地名事典』（日外アソシエーツ、一九九四年）。森鷗外『鷗外歴史文学集』第四卷（岩波書店、二〇〇一年）。中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士編『岩波仏教辞典』第二版（岩波書店、二〇〇二年）。三浦叶『明治の碩學』（汲古書院、二〇〇三年）。陳玉堂編著『中国近现代人物名号大辞典（全編増訂本）』（浙江古籍出版社、二〇〇五年）。富田仁編『新訂増補 海を越えた日本人名事典』（日外アソシエーツ、二〇〇五年）。朱彭寿編著、朱鼈・宋荅珠整理『清代人物大事紀年』（北京図書館出版社、二〇〇五年）。『中国書人名鑑』（二玄社、二〇〇七年）。楊逸撰、印曉峰点校『海上墨林』（華東師範大学出版社、二〇〇九年）。陳祖恩著、大里浩秋監訳、芦沢知絵他訳『上海に生きた日本人―幕末から敗戦まで』（大修館書店、二〇一〇年）。瀧本弘之編著『中国歴史名勝図典』（遊子館、二〇一一年）。後藤朝太郎『支那の体臭』（バジリコ、二〇一三年）。川邊雄大『東本願寺中国布教の研究』（研文出版、二〇一三年）。楊伝慶『鄭文焯詞及詞学研究』（南開大学出版社、二〇一三年）。許培基・葉瑞宝主編『江蘇藝文志蘇州卷』（江蘇人民出版社）等。
- 論文等 佐々博雄「清仏戦争と上海東洋学館の設立」（『国士館大学文学部人文学会紀要』12、一九八〇年）。長尾直茂「吉岡

拜山年譜稿（訂補）——附拜山閔連写真稿——」（『研究集録』（清泉女学院中学・高等学校研究集録）十六号、一九九九年）。
 狭間直樹「初期アジア主義についての史的考察(3)第二章 興亜会についてー創立と活動ー」（『東亜』第四二二号、二〇〇一年）。
 「日本漢学家岡千仞与晚清上海書院士子的筆話」（『檔案与史学』二〇〇二年第六期）。易惠莉「中日知識界交流実録——岡千仞
 与上海書院士子的筆話」（同前）。田中比呂志「清末の江蘇省における諮議局の設置と地域エリート」（『東京学芸大学紀要』第
 3部門 社会科学55、二〇〇四年）。易惠莉「從沙船業主到官紳和文化人——近代後上海本邑紳商家族史衍变的個案研究」（『思
 想与文化』二〇〇六年第三期）。錢琬薇『失落与緬懷 鄒毅及其《海上塵天影》研究』（国立政治大学碩士論文、二〇〇七年）。
 王承略「差強人意」解」（『文獻 季刊』二〇〇九年七月第三期）。川邊雄大「常福寺所藏・「岸田吟香書翰（北方心泉宛）」に
 ついて」（『東アジア文化交渉研究』第三号、二〇一〇年）等。

（しばた・きよつぐ 本学教授）

（おがわ・さとこ 本学大学院修了生）

（とみた・さゆり 本学大学院修了生）

（やまさき・たえこ 本学大学院修了生）

（かい・りょうこ 本学大学院生）